

実践哲学を基礎とした東ブータンにおける 相互啓発実践型地域研究の試み —京都大学国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展の在り方」現地スタディーツアー 2015 年度報告集—

安藤和雄¹⁾、西本恵子²⁾、出屋敷綾音³⁾、福嶋千紘⁴⁾、犬飼亜実⁵⁾、
田中咲妃⁶⁾、新川広樹⁶⁾、横畠尚貴⁵⁾、高浦雄大⁷⁾、浅井 薫⁶⁾、
吉野月華⁸⁾、坂本龍太^{1) 9)}

- 1) 京都大学東南アジア研究所
- 2) 京都大学経営管理大学院
- 3) 京都大学薬学部
- 4) 京都大学経済学部
- 5) 京都大学農学部
- 6) 京都大学総合人間学部
- 7) 京都大学理学部
- 8) 京都大学文学部
- 9) 京都大学白眉センター

2015年8月30日～9月11日国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」の一環で、学生ブータン派遣し、現地でスタディーツアーを実施した。京都大学学生10名、教員2名の計12名がブータン東部を訪問した。空港のある西部パロから東部タシガンに向かって、車で三日かけて標高約九百～三千八百メートルの範囲を移動する中で、気候・植生・生業形態のダイナミックな変化を観察した。タシガン県に到着後、まず、カンルンに立地するシェラブツェ・カレッジで本学学生が日本文化について発表を行い、シェラブツェ・カレッジの学生からもブータンの歴史についての発表があった。つづいてシェラブツェ・カレッジ教員よりディグラム・ナムザ（ブータンの札）の授業があり、学生による伝統舞踊及び現代的なダンスの披露があった。そして、5名のシェラブツェ・カレッジ学生と共にカンルン、タシガン、ラディ、バルツァムにおいて臨地研修、体験学習を行なった。カンルンでは小学校を訪問し小学生に混じって授業に参加した。タシガンでは県知事を表敬後、病院を訪問し、伝統医ドゥンツォの脈診を受けた。ラディでは役場、保健所、寺院などを訪問し、顕出する獣害被害の実態を村人から直に聞き、放棄田の実態を目の当たりにした。バルツァムではリンブ寺に伝わる蛇を食うチャナ・ドルジ像の伝説などの話に耳を傾けた。本プログラムを通して、京都大学学生はシェラブツェ・カレッジ学生との共同生活を行い、交流を深めた。本稿は、ステディーツアーに参加した学生、教員の現場での各自の直観的理解による問題点に関するエッセイ小論集である。各エッセイは、各自のこれまでの経験を背景にし、スタディーツアーであった事実を、日本とブータンとの社会や文化の比較として論じている。その議論は「あるべき人としての生き方」を模索した実践哲学の試みと言えよう。相互啓発実践型地域研究、あるいはフィールドワークによる地域研究に従事することで、「地域研究者」は自ずと実践哲学を追求することになる。このことが本稿では示されていると言えよう。エッセイ小論の各編は以下のとおりである。はじめに：参加型地域研究としての相互啓発実践型地域研究の手法確立を求めて（安藤和雄）、ブータン東部における地方創生（西本恵子）、私の世界を広げたもの（出屋敷綾音）、ブータンという意識と幸せ（福嶋千紘）、ブータンで学んだ「幸せ＝平和」（犬飼亜実）、ブータンの展望と学生（田中咲妃）、霧の向こう側で得たもの（新川広樹）、

ブータンの農業の問題点（横島尚貴）、都市化する秘境（高浦雄大）、大切なのは心（浅井薫）、東ブータンの放棄田 進む農村の過疎化（吉野月華）、おわりに：雨（京都大学白眉センター/京都大学東南アジア研究所 坂本龍太）。

1. はじめに：参加型地域研究としての相互啓発実践型地域研究の手法確立を求めて

東南アジア研究所実践型地域研究推進室室長
（准教授）安藤和雄

1) はじめに

相互啓発実践型地域研究とは相互啓発による実践型地域研究の意である。国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」は学生の主体的参加によるフィールド型の実習講義であり、私が学生たちに伝えたいのは実践に拘った地域研究と、実践に拘ることで研究の現場での直観的理解が求められる地域研究の面白さであり、醍醐味である。また、このような直観的分析が可能となるのも、スタディーツアーの現場である東ブータンの人々が抱える過疎や離農などの地域の問題群が、その背景や要因などについては東ブータンに固有の問題群であるとともに、現象としては日本の過疎や離農の問題群と共通するグローバル問題であり「問題群でくられる場」あるいは「問題群でつながった地域」となっているからでもある。そういう意味で、東ブータンの人も日本の人も問題群で当事者性の関係性で結ばれるのである。私が相互啓発型地域研究を提唱する積極的理由はこの点にもっともその論拠がある^(注1)。以下、第一に、地域研究において実践に拘る私の考えを述べてみたい。第二に、グローバル問題の発生と地域研究の展開についてアメリカの地域研究の衰退と日本の地域研究の展開をからめて言及する。第三に、今回のスタディーツアーのスケジュールと直観の記録と分析について述べる。

昨今、科学においても認識科学と設計科学というグルーピングが明瞭に文部科学省においてもなされるようになった。従来の専門学問の多くは知的好奇心を満たす「あるものの探求」が認識科学であるとすれば、目的や価値の実現をめざす「あるべきものの探求」が設計科学であるとされる^(注2)。専門分野を確立した既存の学問の多くは

認識科学と位置づけられ、地域研究は独自の「専門分野」をもつ個別の学問的営みではないような見方もされる。本節の目的は、地域の人々が抱える問題を当事者的に捉え、「人はどう生きるべきかを問う」実践哲学^(注3)を方法論的に組み込むことで、地域研究は設計科学に位置づけられる固有の学問領域と方法論をもつ「専門分野」として確立できる可能性がある、ということを上記の三点から示唆することにある。そして、このことで本稿に収められた各小論の導入にかえたいのである。各小論は相互啓発実践型地域研究の具体的な事例となっている。そして、各小論は専門性に囚われた専門的知識による分析的あるいは認識科学的アプローチ以外にも、場に身体をもって存在するという「存在の共有性」により人に備わった直観力をうまく引き出すことによる理解、人間の生き方を探求する実践哲学的アプローチによる理解が可能であることを示してくれている。それは一方で、ファーミング・システムや農村開発の研究分野で1960から70年代の「緑の革命」の反省から1970年代後半以降積み上げられてきた参加型研究手法が地域研究においても十分に可能であることを示唆している。

2) 実践と地域研究

生きることは、積極的であれ消極的であれ、何らかの選択をすることである。困難と対峙し困難の克服を目的化した時に、生きようとするエネルギーが身体の中から湧いてくる。これは一般的にも多くの人々の賛同を得る人生哲学であろう。私もそう思っている一人である。困難との当事者的関係の成立こそが、生きようとするエネルギーを呼び起こすとも言えよう。「困難や障害にうちかち、それをとりのぞこうとすること」を「実践の要求」と呼ぶ^(注4)。実践という言葉を使って表現される行動や行為を、私も、そう定義している。岩崎武雄が主張するように、実践的立場にたつということは、人間の立場にたつて、自己の実存の立場からいかに行為すべきかという考察を加え、

価値判断をくだすことである^(注5)。困難や障害という問題の克服を目指すことが実践的立場かつ当事者の立場であり、困難や障害という問題の論理的説明のみに目的を限定することは傍観者的立場である。傍観者的に問題と対峙した時には、生きようとするエネルギーは身体の内側からわいては来ない。生きることの醍醐味は、生きようとするエネルギーを実感し、そのエネルギーを使うことである。したがって問題という現象を説明するという「抽象的な行為」にあるのではなく、問題を身体をともなった行動によって克服しようとする「具体的な行為」にあると言えよう。実践はエネルギーを要する行為でもあり、実践は結果として人々を活気づける。

京都大学東南アジア研究所が重視するフィールドワークによる地域研究が他の既存学問と大きく異なる点は、研究対象となる地域あるいは場に足を踏み入れることを大原則としていることにある。場に身体を置くことから、場が抱える問題とでも言える、場に暮らす人々が直面する問題を見ることができない状況に研究者は自己を追い込んでいくことになる。自ずと研究者は実践的立場をとらざる負えなくなる。いい意味で、精神的に逃げ場のない退路をたれた状況に足を踏み込んでいくことが、フィールドに行くということになる^(注6)。フィールドワーカーである地域研究者は、多くの場合、最初から問題と当事者的に対峙しているわけではなく、問題を主体的に自ら探り当てるといふよりは、問題が主体的に「わたし」であるフィールドワーカーにある時に飛び込んできて、直観的に分かる場合が多い。私はこの場における直観的に理解する心を「在地の自覚」と呼んでいる。意識する、しないにかかわらず、人々が生活する場に入った外部の人である「わたし」には「在地の自覚」がすでに備わっているのである。盤珪は、彼の法話を聴きにきた寺院の建物内の聴衆に向かって、寺院の外でなっている鳥の鳴き声が、法話に耳を傾けているその時にでも、聞こえていると云い、仏心は誰にでも備わっていると説く^(注7)。人が抱える問題に寄り添おうという心があるからこそ、人は人を受け入れる、それが人間が社会性を営む源であると私は考えている。だから、「在地の自覚」という心は、あたかも、盤珪がとく仏心のようなもので不生である、と言えらる^(注8)。

それをいかに実感するかである。

本講義で私は学生たちに是非、学生たちに備わっている、場の人々が抱える問題を理解しようとする心が現れてくることを擬似的でもいので実感してもらいたいと願っている。それが本講義のスタディーツアーの目的である。したがって学生たちがブータンへの渡航に際した事前準備として、何をどう見るか、とか、現地での詳しい事情は一切伝えていない。現地での調査旅行での注意点や携行品、天候などの情報と、学生からの質問に答えたのみである。学生たちにとってブータンははじめての国である。はじめての国、異文化に現場で触れるという機会は人生のなかでそう多くはない。貴重な機会を先入観で奪うことは極力さけるべきだろう。この機会に学生たちは、「現場での事実を素直につかみ、問題を直観する」という実感をうまくいけばつかむことができるからだ。私はそれを可能にするのは、初めて事実に出会った時、客観という分別（先入観）から分析的な理解を試みるのではなく、分別停止によって、偶然的必然として、同じ場に居ることにより、事実と共在化していくことであると思う。そうすることによってのみ、個別の存在である「わたし」と「あなた」は、事実を通じて「わたしの立場」が「あなたの立場」にひらかれ^(注9)、場における人々の共在感覚が生まれることによって^(注10)、そこから相互啓発による理解が進むことになるのである。

本稿は参加学生たちの「現場で素直につかんだ事実」とその彼らなりの意味づけが行われている。

3) 設計科学としての日本における地域研究の展開

地域研究は英語では Area Studies と呼ばれ、第二次大戦後にアメリカで始まった。Area Studies はアメリカの世界戦略の政策作成に寄与する研究であり、政策科学に位置づけられていた。1960年前後に日本に導入され、日本では社会科学の一分野として現在確立している。しかし、ベトナム戦争での敗戦、東南冷戦の終焉により、本家のアメリカでは地域研究は廃れたと言われている。その背景を考えるうえで、以下の立命館大学国際地域研究所の Web ページの本名純所長の「所長あいさつ」^(注11)が参考になる。

国際地域研究所は1989年に設立された。その目的は、国際学と地域研究の融合に置かれている。

国際学は国家間を横断して対応がもとめられる環境破壊、貧困、紛争、難民などの問題を研究対象としてきた。一方、地域研究は地球規模よりは一定の場所に住んでいる人々の生きざまや社会を対象として、「固有性」を「発見」することに関心を抱き、国を超えた共通性や普遍性には大方が無関心か、次元のことなる話とみなしてきた。しかし、テロ、人身売買などの「国境を越える犯罪」はグローバル化しているが、そのローカルな実態は地域研究によって解明される。したがって、国際学と地域研究の融合が新しい研究パラダイムであると、国際地域研究の意義が説明されている。

模式化するならば、アメリカと世界の国々や地域は一對一の関係で結ばれていたが、世界の国々におけるグローバルな関係が成立してくると、アメリカの世界戦略は、地球規模の国際関係として捉えていく必要が増し、一對一の中で対象国を研究していた地域研究の魅力が薄れていったのであろう。あながち私のこの推測は見当はずれではないと私は思っている。

しかし、日本においては本家アメリカでの衰退と異なり、将来の動向はさておくとして、現在も地域研究への関心は決して低くない。その背景は日本の地域研究は政府の国際戦略に寄与する使命を持たされなかったことにあるのではないだろうか。むしろ、東南アジア研究所の設立がフォード財団の支援を受けたことから、公式的には、政府の戦略や援助協力などとは距離を置こうとしてきたのである。幸いなことに、第二次世界大戦後、世界の国々とのアメリカ的な政策的戦略を必要とされるような関係を日本は求められてこなかった。日本は敗戦国であり、友好関係のみが日本にもっとも求められた国際関係であった。これが幸いしたと私は考えている。誤解を恐れずに言及するならば、日本に導入された地域研究は国家という枠組みにこだわることなく、「地域（＝場）の説明」、つまり、研究者の興味にしたがいで、あたかも政治中立的に現象の客観的説明という自然科学的な地域研究が可能となったのである。そして、さらに幸運であったのは、自然科学は普遍的客観を現象（客体）の説明に求められたが、地域研究では現象（地域という客体）の固有性の説明が求められたことである。しかし、固有性の説明は、普遍性との、もしくは、他の固有性との比較の中

で可能となる。地域を擬人化するならば、個人の固有性はあくまで全体的人格そのものを特徴として捉えなければならぬとするのか、人間の顔とか背丈とか、気性とかの個別的特徴の集積として捉えることが可能である、とするのかでも研究姿勢は大きく異なってくる。また普遍性との比較から専門によって切り取られる特徴から地域の固有性を説明しようとする研究者はディスプリン派、つまり、既存の専門学問の中での分析を試みた。そして既存学問における研究とは一線を画するために、地域の固有性は地域の全体性に現れるという見方から、個別学問を基盤として学際研究や文理融合研究が重視されてきたのである。一方で、切り取られた特徴の集積では全体性は把握できず、そもそも普遍的な平均像の個人は現実には存在しないのであるから、切りとられた特徴の普遍性との比較において、その集積として地域の固有性を捉えることは実質的に意味がなく、地域の固有性はあくまで、地域の全体性で描かれる固有性の相互比較の中で、あるいは、地域の固有性が説明される全体性を構築している、その土台となっている本質的特徴に求めるべきであるという見方から地域の固有性が明らかにされてきた。後者は、地域研究の学問としての専門性を確立したいと願ってきた研究者たちに多いのである。

以上から理解されるように、アメリカの地域研究は、東アジア、東南アジア、南アジア、アフリカ、南米などのいわゆる開発途上国のそれぞれの国とアメリカが一對一で関係を構築する上での政策作成という明確な現実的課題のために、「地域を各専門分野（主に社会科学）がその専門性により分析し、それを集積すること」であった。それはあくまでも、対象地域は一国家であり、一地域である。地球という国家の集まりである多の一であった。その一である地域研究対象国家とアメリカという一が向かいあい、アメリカの一が地球という国家の集まりである多の中でアメリカと対象国家という一を位置づけるための地域研究であったのである。しかし、多が一であるというグローバルな世界においては、一對一の政策作成よりも一對多がより重視され、一對一に必要とされた「アメリカにとっての地域の固有性」を明らかにする地域研究の現実的必要性は消失し、むしろ、多を横断的に専門という普遍性からアプローチしてい

る既存学問に立ち戻ることで十分となったのであろう。むしろグローバルという定義自体が「地球という普遍的存在」にあるのであるから、多のものが普遍性から一を見ていくことになる。したがって、従来のアメリカ型の地域研究自体がそれぞれの専門分野に戻っていただけだとも言えるであろう。しかし、日本の地域研究は、つまり日本にとっての開発途上国とか、ましてやアメリカに寄与するというような役割は当初から地域研究に存在せず、「地域で固有性を発見すること（研究すること）」というきわめて政治的動機性の希薄な学術研究としてスタートしたのであった。だから、地域研究に参加する研究者は、必然的に、他の専門分野の研究者との差別化をはかるために、地域という場に限定された研究の対象性に拘ることになったと云えるのではないだろうか。しかし、グローバル問題が出現し、従来型の一国家、一地域という一つの場を客体として分析し「地域の固有性」を明らかにすれば事足りた地域研究の時代は日本においても終焉しようとしている。一つには、上記に説明したように、すでに、一国家、一地域はもはや個別には存在しておらず、他との関係性の中での存在が際立ってきている。それは一集落においてもそうである。たとえば、バングラデシュの村では、出稼ぎ者が各世帯からでていくほど、外とのつながりを無視して集落の固有性を捉えることは難しくなっている。また、学問が現実に対して超然とした態度をとれる時代が終わり、社会への具体的貢献が求められているのである。地域の固有性の理解だけでは、こうした要求に応えることは明らかに困難となったのである。それに応えようとしたのが一つには立命館大学の国際地域研究である。

地域の人々が抱える問題を地域の固有性の一つとして包含する視点が地域研究者に自覚されれば、地域の固有性を明らかにするという認識科学としての従来型の地域研究を、ローカルからグローバル問題の克服という現代的課題に取り組む設計科学として地域研究が生まれ変わることが可能となる。しかし、その際に重要となるのは、研究者自身が「いかに生きるべきか」という目的や価値を問うことである。つまり実践哲学に基礎づけられた新しい地域研究が構築してされていくことが必要となるのである。

4) スタディーツアー・スケジュール (2015年)

8月29日(土) 深夜便(正確には8月30日)のTG673便にて関空-バンコク

8月30日(日) [曇のち雨] B3 701にてバンコク-パロ パロからティンブーへ (Hotel 89 泊) ティンブー中央病院、大仏。

8月31日(月) [雨] ティンブー-ブムタン (Hotel Home 泊)

道路の拡張工事でなんども道路で我々の乗った賃貸ミニバスは停車、ティンブーを早朝6時半にでるが、ブムタンのホテルについてのは夜20時。

9月1日(火) [雨] ブムタン- カンルンのシェラブツェカレッジ (ゲストハウス 泊)

早朝 ブムタン発 3000m~3700m 標高の峠越えするが、雨で視界なし。モンガールの手前とモンガールを過ぎてからの道路は工事により悪路と、待たされる。タシガンのKCホテルで夕食。シェラブツェカレッジの手前の道路で、もう一台のバン型の車が泥に車輪がはまる。シェラブツェカレッジからの学長自らの応援で車輪脱出。22:00 過ぎにゲストハウス着。(大学ゲストハウス着)

9月2日(水) [雨] 午前 学長表敬、学生との交流会、午後 カンルンのKanglung primary schoolの見学 夕方 シェラブツェカレッジの学生たちによる文化の夕べ(伝統ダンスの披露)と夕食の招待。(大学ゲストハウス着)

9月3日(木) [雨] 午前 学長と研究打合せ(安藤)、カンルンのRongthung primary school 見学と障害者のためのDraktsho 職業訓練校の見学、タシガン県の病院の見学。タシガン県知事への表敬。午後 ラディ・ゲオグ(ラディ行政村)に移動。5名のシェラブツェカレッジの学生(男性3、女性2)が京大生10名(男性4名、女性6名)と教員2名に通訳を兼ねてスタディー・ツアーに参加。夜、ラディ村の村長のラディ村の農村開発の現状と問題に関するスライド発表。(ラディ行政村の公民館にて宿泊)

9月4日(金) [晴] 午前 ラディのアマジヨモを祀ったラディ・ラカン(寺院)、村のプライベートのラカン、棚田と段畑の休耕地などの見学。午後 村役場見学、村での聞き取り。(ラ

- ディ村行政村の公民館にて宿泊)
- 9月5日(土)[晴] ラディ村の保健所(BHU: Basic Health Unit)の見学、昼 パルツァム行政村に移動。ガイドのカルマ氏の親戚宅で昼食、周辺の耕地の見学、夜、ラディ中等学校の文化の夕べ(ダンスと歌を学生たちがパフォーマンス)。(パルツァム行政村の村役場と公民館で宿泊)
- 9月6日(日)[晴] RNR(村の普及センター)見学と村人に作物栽培などの聞き取り(安藤のみ)。パルツァム・ラカン(寺)の見学。昼食をタシガンのKC Hotelでとる。午後 モンガルへ移動。(Hotel Druk Zom 泊)
- 9月7日(月)[晴] 早朝薄暗いうちに出発。セングルの手前で大きなけがれで2時間不通。セングルで昼食。トンサに移動。(Tashi Ninjay Guest House 宿泊)
- 9月8日(火)[晴] 午前 トンサ博物館見学 昼前にプナカに向けて移動。プナカ宿泊。(Kingaling Hotel 泊)
- 9月9日(水)[晴] プナカ・ゾン(プナカ県庁の見学)、昼にティンブー着。JICA表敬、職員からJICAブータンの説明を受ける。遅い昼食。保健省次官表敬(安藤・坂本のみ)、学生たちは土産などの購入。夕方、パロに移動。(BT Gatsel Hotelにて宿泊)
- 9月10日(木)[曇] プナカーパロ、B3 700便にてパロからバンコクへ
- 9月11日(金)[晴] バンコク-関空
関空に早朝到着。関空2階の待合所にて8:00から12:00の間、総括的なミーティングを行い。それぞれの「発見」について発表を行う。12:00解散。

5) 直観の記録化と発表および分析

私が学生たちにスタディーツアーの間、作業として求めたのは、その日の行動記録(時刻、場所、会った人、見学した場所、聞いたこと、見たことなどの事実)、と事実の中で、感動した順番に優先順位をつけて3個取り上げ、キーワードと説明を書いておくこと、であった。そして、帰国時の関空の2階待合所の空いた空間を利用して、それぞれの行動記録から、優先順位をつけて3つの事実(ただし5つまでの発表は認めた、人によって

は4つ、5つの事実を発表した)と、その事実がなぜ重要なのかに関する自分の意見を大型のポストイットに表に事実、裏に説明という具合に書いてもらい、一人ずつそれを読み上げることで発表してもらった。発表毎に事実認識の間違ひがあるかどうかを検討議論し、必要であれば修正した。そしてそれを前のボードがわりとなったガラス版に張り付けていった。ここまでで12:00となってしまう、学生各自の午後の予定があったので、帰国時の作業はここまでとした。本来は事実の認定あるいは共有が終わったら、次は各自の発表した事実を表題をつけてグルーピング化する。グルーピングは大体5つ前後くらいが適当である。この根拠は5つ以上になると分析が煩雑になってしまうからである。このグルーピングにより、「発見された事実」の集計による重み付けがなされることになる。この作業に入る前に、もう一度、学生たちに各自が「発見」した事実とその説明に検討議論を踏まえて修正することを依頼した。そして修正された各事実とその説明を安藤に送ってもらった。本来、発表者が集まり、グルーピングによる重み付けによる分析をするべきであるが、残念ながらその機会はいまのところなく、私が主宰している9月の京滋フィールドステーション月例研究会の際にその会に集まった者数名で試験的に行った。ただし、その会は海外からの参加者もあったので、安藤が発表された事実を英語訳して、参加者の意見でグルーピング化した。しかし、この作業はあくまで、デモンストレーションとして行ったので、今回はあえてその結果は公表しない。またいつか機会があれば是非学生たちとともに、最終的にグルーピングによる集計表によって直観により発見された事実の定量分析を行ってみたいと考えている。この直観的分析手法は今回がはじめてではなく、「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業:南アジア周辺地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究」(代表 安藤和雄、2007~09年)でバングラデシュの15のNGOによりECF(Environment Coping Forum)をつくり、5か所の地点でのNGOのプログラムの効果と問題点について、PLA(参加型相互学習実践法)によって、各NGOのスタッフが参加して、大体20名前後により2~3日の調査を行い、1日をかけて調査メ

ンバー全員による上記のような発表会を行い、それを分析して、各地点での各プログラムに関連したグルーピングの分析を行ったのである。直観という現場での観察と聞き取りによる質的データを量的に分析する手法は、PLA と KJ 法から工夫し、それを社会的ソフトウェアと呼んだ。社会的ソフトウェアと名付けた理由は、NGO の現場のスタッフたちは実践の現場には強いが、なかなか、その思いを説得的にプログラムの財政的支援者（多くの場合バングラデシュでは海外の援助団体や ODA である場合が多い）に伝えることが困難である。この現状を打開するという意味が込められている^(注12)。

本稿に取められた各小論は、参加学生たちが閑空の待合広場で発表し、検討議論された直観によって各自が発見した事実にもとづいてまとめられたものである。素直な心をもって現実に接すれば、エッセンス的に事実を読み解くことができる。私は今回のスタディーツアーを企画した者として、地域の人々が抱える問題を直観的に理解した参加学生たちの「成果」を大変高く評価している。それは、私流に表現すれば、地域の人々に寄り添おうとする「在地の自覚」が発動したのであると見えよう。参加学生たちはいわゆる専門家である地域研究者ではない。しかし、相互啓発実践型地域研究として企画されたスタディーツアーに参加することで、「地域の固有性」という地域の人々が抱える問題を直観的に捉えることができている。「地域研究の素人」が地域研究に参加するためには、直観的分析ないし直観的理解が方法論としては不可欠となる。参加学生たちの小論がこのことを実証していると言え、相互啓発実践型地域研究が参加型地域研究として可能である確かな手ごたえをつかんでいる（尚、私の事実の発見については、注13、として記しておいた）。

実費参加してくれた学生、国際交流科目担当関係者、教職員、業務旅行株式会社関係者、シェラブッチェ大学、ティンブー病院、タシガン病院、ラディ村の保健所（BHU）関係者、ラディ、バルツァムの村長他住民の方々、現地旅行代理店、タシガン県知事、ブータン JICA 事務所等々の今回のスタディーツアーを支援していただき、お世話いただいた皆さん、また、本報告の掲載の機会を与えてくださったヒマラヤ学誌の編集員会に記し

て感謝致します。

注：

注1) 安藤和雄 2015 「グローバル問題に挑戦する実学としての地域研究の展開」『京都大学東南アジア研究所 50 周年記念 21 世紀の東南アジア研究—地球社会への発信』東南アジア研究所：102.

注2) 認識科学と設計科学の違い等については、『新しい学術の体系—社会のための学術と文理の融合—』（日本学術会議運営審議会附置新しい学術体系委員会 2003）を参照。

注3) 実践哲学は一般的には「実践的な事柄を対象とする哲学。意志的行為の領域で、あるべきこと、または、なすべきことを規定する哲学で、狭義には倫理学・道徳哲学をさし、広義には政治学・法律・経済・技術・芸術などの分野の哲学的考察を含む。また、通俗的には日常生活上の指針となる哲学をさす」（『大辞泉第二版』小学館）と説明される。哲学の目的を「哲学とは、世界はいかなるものであるかという〈世界観〉及び人生はいかなるものであるかという〈人生観〉を学的に取り扱うものである」（西田幾多郎 1975（1953）『哲学概論』岩波書店：5）や「私は哲学というものは人間の立場に立たなければならぬと考えている。〈略〉私の考えでは、われわれ人間の立場にたつて哲学しようとするとき、そこにどうしても直面せざるをえない最も重要な問題は、われわれがいかに生き、いかに行為すべきかという実践の問題である。われわれは一瞬一瞬みずから行為しつつ生きてゆかねばならない。しかもその行為は自己の決断によって行わなければならないのである。〈略〉こうして私は哲学は究極的に実践的立場にたつてわれわれみずからいかに行為すべきかということを考えてゆかねばならないと思うのである〈以下略〉」（岩崎武雄 1976『真理論〔哲学体系 第一部〕』東京大学出版会：i - iii）と説明される哲学の重要な分野であり、最近では、『実践哲学について—西田幾多郎文選』（西田幾多郎 2008、書肆心水）が出版されている。

- 注4) 思想の科学研究会 2012『新版 哲学・論理用語辞典 新装版』三一書房:194-195。
- 注5) 岩崎武雄 1977『存在論・実践論〔哲学体系第二・三部〕』東京大学出版:181-192。
- 注6) 安藤和雄 2015「場における当事者的関係性が進める実践型地域研究」『京都大学東南アジア研究所 50周年記念 21世紀の東南アジア研究—地球社会への発信』東南アジア研究所:103-105。
- 注7) 玉城康四郎 1982『盤珪禅師法語』（禅の古典 8）講談社:65。
- 注8) 「不生とは不生な仏心、即ち親から生みつけて授かった仏心であり、それは生得のものであって後天的に得たものではなく、その点不生であり、不生のものであるから霊明なものであるという。不生のものは同時に不滅のものであるはずであり、盤珪は不生と言えは不滅と言う必要はないとし、不生不滅とは称しなかったが、不生禅の不生には不滅の意味を同時に含んでいることはいうまでもない。」（古田紹鉄「解説 不生禅」『盤珪禅師語録』（鈴木大拙 編校）2007（1941）＜岩波文庫＞岩波書店:285-294）
- 注9) 「ひらく」、意識のあり方については、上田閑照 2004（2000）『私とは何か』（岩波書新書）岩波書店、を参照して欲しい。
- 注10) 「人と人が共にある、そのやり方がいかに多様でありうるか。アフリカのフィールドで人々と生活を共にしながら、私は身にしみてそのことを感じた。共にある態度、身構え、そういったことを呼ぶのに、ここでは「共在感覚」という言葉を用いてみた」（木村大治 2003『共在感覚—アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都大学学術出版会:ii。
- 注11) http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/ras/02_aboutus/02_about.html（2015年10月26日アクセス）
- 注12) 安藤和雄 2015「バングラデシュの環境問題—実践型地域研究—」『改訂版 地域の発展と産業』（河合明宣 編）放送大学教育振興会:144-159。
- 注13) 安藤の直観で発見された事実：
〔1〕インド人化した日本人 Indianized Japanese

- キーワード:文化相対化、アジア人共通文化習慣、時刻拘束外世界
- 事実:運転手センチョさん、ラッパさんが今回のスタディー・チームの朝の出かけ時刻などの様子を見てのコメント「このグループは日本人ではなく、インド人だ」
- 理由:今回の参加者である若い日本人に、私が暮らしを経験できたバングラデシュ、インド（東北地方）、ミャンマーなどのアジア人に共通する時刻や時間に縛られない共通する文化要素を発見できた。本当にリラックスしていた「今」をいきていたことを実感できた。
- 〔2〕山岳道の土砂崩れ Land slide of mountain road
キーワード:山道、モンスーンの雨、高所、ランド・スライド、東ブータン
- 事実:9月1日、Jakar から Ura をとおり、トゥムシン・ラの3700mの峠を超え、Sengorの村を過ぎたあたりから、いたるところで小さな土砂崩れを見るようになる。特にSengorからの大滝の手前の谷筋の土砂崩れは上部に直径5m以上の大岩が横木一本でかろうじてとどまっていた。いつ何時大きな土砂崩れがあってもおかしくない状況があった。9月7日にMongarからSengorに向かう。Sengorの手前尾根の斜面が一面崩れていた。その復興工事で3時間待たされた。そしてTrongsaに到着する。9月8日朝、運転手のラッパさんの話では、9月8日朝にまた同じ箇所土砂崩れがあり、今後2日間は不通という処置がとられた。間一髪だった。また、Mongar付近、Trongsa付近の道路拡張（1車線から2車線へ）工事で、道は残土を運ぶトラックの轍が激しく、どろどろの状況。
- 理由:開発をささえるインフラ整備の第一は道路整備である。しかし、山岳地形であるブータン、特に、東ブータンはV字谷で、山は急峻でモンスーンの雨が多い。したがって、東ブータンにおける道路インフラの整備と維持は困難を極める。また、土砂崩れなどで道路が不通でも根気よく待つブータンの人々忍耐強さの根源をみた気持ちがあった。
- 〔3〕栽培放棄田の増加 Increasing of Abandoning Rice Fields
キーワード:休閑地、栽培放棄地、棚田、東ブー

タン

事実：Radhi 村と Mongar から下った棚田でみた栽培放棄田。とくに後者では昨年の9月には全面的に耕作されていたので、今年から休閑がはじまった。

理由：Mongar から下った棚田では、今年は休閑地が新しくかなり広く出現したことが昨年の写真を比較するだけでも明示できた。

[4] GNH のとりあげ方の減少 Decreasing of taking up GNH

キーワード：政策転換？ GNH

事実：シェラブツェカレッジの学長との会話の中で話題となった。また、GNH については、RUB の総長も彼の話の中では一言もふれなかった。

理由：ブータンの GNH については佐々里に招へいしているシェラブツェカレッジの若い教員や学生たちも GNH については冷めた意見もきかれた。恐らく、GNH に関して一時期の熱は去ったという空気が流れている。

[5] 糧飯 Mixed Rice

キーワード：カラン・トー（トウモロコシご飯）、大豆ご飯

事実：Radhi と Bartsam の村で、大豆、大麦、とうもろこしなどと混ぜ合わせたご飯を食べていたことを聞かされた。

理由：ミャンマー、バングラデシュ、インドのアルナーチャル州のカメン州、日本などでは雑穀とのまぜ糧飯が知られている。やはりブータンもこうしたアジアの稲作文化に共通している糧飯文化をもっていた。

2. ブータン東部における地方創生

経営管理大学院 西本恵子

1) ブータン訪問の経緯

(1) 国際交流科目

京都大学では古くからブータンとの密接なかかわりを持っており、健康 (Health)、文化 (Culture)、安全 (Safety)、生態系 (Ecosystem)、相互貢献 (Mutual contribution) を5つの柱としたブータン友好プログラムを実施している。この一環として、国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」と

して平成27年8月30日から9月11日にかけて学生10名・教員2名の計12名がブータン東部を訪問した。

タシガン県に立地するシェラブツェ・カレッジにて日本の文化について発表を行った他、ブータンの歴史、ディグラム・ナムザ（ブータンの礼）、踊りの授業を受けた後、5名のシェラブツェ・カレッジ学生と共に水田地帯ラディ、リンブ寺を有するバルツァムにおいて、臨地研修、体験学習を行った。役場、保健所、寺院、小学校などを訪問した他、現地の家々を訪ね、村人から話を聞いた。標高約九百～三千八百メートルまでの範囲を移動する中で、気候・植生・生業形態のダイナミックな変化を観察し、ミトゥンに触れ、顕出する獣害被害の実態を村人から直に聞き、放棄田の実態を目の当たりにした。地に伝わる女神アマジョモ、蛇を貪るチャナ・ドルジ像の伝説の話に耳を傾け、伝統医ドゥンツォの脈診を受けた。特に、臨地研修・体験学習による共同生活を通じて両国の学生は交流を深めた^(注14)。

(2) 文化人類学的アプローチ

筆者は経営管理大学院の10期生（社会人学生）であり、京都大学のブータン関連プログラムには、おそらく経営管理大学院からの初めての参加者である。通常、経営学などの論文では、引用文献が多いほど信頼性が高いとされる。しかし今回は書籍に拠らず「フィールドにおいて実際に見たこと・聞いたことだけをもとに考察を深める」という文化人類学的アプローチにより、ブータンの文化・経済への理解を深めるよう試みた。これは経営管理大学院および複数の学科が共同で進めているデザイン学におけるエスノグラフィと共通するアプローチでもある。

2) ブータンの抱える諸問題

(1) 首都への人口集中

9月9日に訪問した JICA ブータン事務所の高野副所長によると、ブータンでは、2020年には人口の約40パーセントが首都ティンブーに集中するという統計があり、これは日本の東京への人口一極集中と共通する問題である。特にブータン東部では各所に放棄田が散見され、問題の深刻さを窺わせた。その原因としては、農村地帯での所

得の低さや、十分な医療が受けられないことがある。さらにブータンでは仏教思想により殺生を行わないため、農業における害獣被害を食い止めることができていないといった事情もある。日本の成長点モデルに見られるような地方都市の発達が十分でないこともあり、ブータンでは日本以上に首都への一極集中が続いているのである。

(2) 産業構造

インドと中国の中間に位置するブータンは、その政治的な背景からインド経済圏に属しており、農業国でありながら米など主要な農作物の多くをインドからの輸入に頼っている。工業品に至ってはそのほとんどがインドやネパールからの輸入に依存しており、商店に並んでいる製品のほとんどが国外からの輸入品である。これは賃金が近隣国と比較して高額のため輸入した方が安価であるためだが、一方で国家予算の約25%をODAに依存するなど、極めて不安定な経済状況に置かれている。

こうした状況の中、ブータンでは教育に力を入れており、今回訪問したシェラブツェ・カレッジを含む13の大学がブータン王立大学の組織に属している。これはつまり、大学教育の充実により今後、多くの大卒エリートが排出される一方で、その雇用の受け皿が国内には十分に確保できないという問題が生ずることになる。

今回、ブータン王立大学総長との意見交換の機会があり、農業に次ぐ次世代産業と卒業生の進路をどう考えているのか質問したところ、水力発電や自然資源産業などに期待を寄せているものの、国内の受け皿は十分ではないとのことだった。

(3) 交通インフラ

さらにブータン東部の抱える深刻な問題として、交通インフラの脆弱さが挙げられる。急峻な山岳国であるブータンでは鉄道を敷くことができず、たとえばタシガンから首都ティンブーに出るためには丸2日かけて自動車でも東西縦貫道を往來することになる。しかし雨季は頻繁に崖崩れが発生して、しばしば交通止めとなる。このことは地方の経済発展を遅らせるとともに、先端医療が受けられない状況を生み出し、さらに地方政府の役人が中央政府との調整のためにしばしば長期間に

わたり不在になるなど、地方行政を停滞させる原因にもなっている。

3) 観光産業の可能性

(1) 現在の観光産業

現在、ブータン政府は、ブータンでの旅行に1日当たりの公定料金を設けている。この公定料金には、内国税US\$65、手数料（利権料を含む）、宿泊費、食事代、ガイド費用、国内移動費用、トレッキングツアーのキャンプ設備、運搬代が含まれている^(注15)。

ここから算出される旅行費用は他国と比較すると極めて高額であり、その結果、ブータンを訪問する旅行者のほとんどが富裕層もしくはそれに準ずる層となっている。

こうした独特の観光政策を設けていることの狙いとしては、政府の収入源を確保することと、バックパッカーの入国を制限することでネパールのような風紀の乱れを防ぐことだとされている。また、こうした外国人の旅行手配の取り扱いは、初期参入した旅行会社の独占状態となっている。

(2) 高い工芸品レベルと機会損失

実際にブータンを訪れた実感として、ブータンの人々は非常に優れた美的センスを持っていると感じる。町並みは整然と整っており、伝統的家屋は端正で美しい。男性も女性も着道楽であるらしく、民族衣装のキラ（女性）やゴ（男性）の色合わせや着こなしを見ることは、ブータン滞在中の大きな楽しみである。

私自身は古い銀細工を集めることを趣味としているため、女性が両肩でキラを留めるための「コ

表-1 ブータン旅行の公定料金

時期	料金
3月～5月	1人：290ドル
9月～11月	2人：280ドル（宿泊時は2人部屋使用） 3人：250ドル（宿泊時は2人部屋使用）
.....
1月～2月	1人：240ドル
6月～8月	2人：230ドル（宿泊時は2人部屋使用）
12月	3人：200ドル（宿泊時は2人部屋使用）

マ」というブローチを探した(写真1)。すべてのブータン人女性が使用するもののはずだが、なかなか市販されていない。富裕層の宿泊するタージ・ホテルの売店でも見つからず、最終日ようやく工芸品店の2階で、ほこりまみれで値札もついていないものを見つけることができた。

このことも含めて、実際にブータンを旅行して感じた違和感のひとつに、現地の人々の生活の中で使用されている工芸品のレベルが高いにも関わらず、土産物のバリエーションが少ないことが挙げられる。また、ティンブーの売店に並ぶ工芸品の多くはネパールからの輸入品であると教わった。せっかく多くの富裕層が訪れており、また高いレベルの工芸技術を持ちながら、なぜそれを積極的に外貨獲得に活かさないのかと感じる。

(3) フェアトレード

一方、ブータン東部の農村地帯の過疎化と放棄田の増加を食い止めるためには、農業と兼業できるような副収入源を確保することが有効である。つまり、ブータンの人々の優れたセンスを活かした工芸品の制作・販売が、そのひとつの解となるのではないだろうか。

ブータンでは日本の養蚕と異なり、野蚕の抜け殻を利用することで蚕を殺さずにワイルドシルクを産出する(写真2)。

現在、こうしてネパール製の工芸品が流通している背景としては、農作物と同じく人件費コストが安価であることがあり、おそらく工芸品の輸入を扱うブローカーがその事業収益を独占していることが推測される。

このため、ブータンの農家が副業として制作した工芸品が販売され、その適正な収益が農家に還元されるような、フェアトレードの仕組みを構築することが有効だと考えられる。さらに、兼業農家に対して優先買い取りが行われるようなシステムを構築すれば、放棄田の進行は食い止められるのではないかと。

(4) 持続可能な援助

このようなフェアトレードを構築する際、必要な要素技術としては、観光客、特に富裕層が求める製品をアドバイスする目利きの役割と、都市部や海外への販路の確保がある。

現状、日本のブータンに対する援助はその総額が極めて大きいにも関わらず、ざるに水を注ぐような状況であるように感じる。対してオーストリアの援助による博物館運営などを見ると、さほど費用がかかっていないであろうにも関わらず、訪問者にはそれがオーストリアの援助によるものだという印象を強く印象付ける。

ブータンと非常に似通った文化を持つ国として、日本がこうしたフェアトレードの構築を通じてブータンの地方創生に関わっていくことができれば、その経験は同様の問題を持つ日本にも応用できることとなり、また市場原理に基づいた援助を行うことで、国費の有効な活用にもつながるのではないだろうか。

謝辞

今回の国際交流科目において引率・指導をご担当くださった安藤先生、坂本先生、ならびに世代の離れた社会人学生である私を快く受け入れてくださった学生のみなさんに、深くお礼を申し上げます。

注)

注14) “京都大学ブータン友好プログラムホームページ「国際交流科目」” http://www.kyoto-bhutan.org/ja/news/127_2015-10-02.html

注15) “ブータン政府観光局ホームページ「旅行の手配」” http://www.travel-to-bhutan.jp/plan_your_trip

3. 私の世界を広げたもの

薬学部薬学科5年生 出屋敷綾音

「自分の世界を広げたい」

5年生となった私が一般教養科目である国際交流科目を、とりわけブータンに渡航するこの科目を履修したいと思った最大の理由である。段々と学年が上がっていく中で、私は自分の世界がより専門的に、より「狭く」なっているのではないかと感じていた。渡航を終えた今では、ブータンでの2週間の生活がそんな私の視野を広げてくれたと確信している。

ブータンでは、ありとあらゆるところに未知との遭遇があった。標高4000m級の山々が織り成す雄大な渓谷美、民族衣装を着た人々がその一部となって溶け込むブータンの風景、「唐辛子は野菜である」とする独自の食文化、3時間の通行止めにも動揺しないブータンの時間の流れ方など、ブータンで直面したもの・ことの全てが新鮮であり、ブータン滞在中は最初から最後まで驚きと感動の連続だった。これら未知との出会いが、当たり前だった毎日に対する見方に変化を与えてくれた。ただ、私の視点に最も影響を与えたのは、壮大な景色でも強烈な食文化でもなく、ブータンの人々の心・人生観であったと感じている。

ブータンで生活した2週間の間、私たちの集団の中には必ずブータン人の姿があった。私たちのグループ専属のガイドさん・ドライバーさんがおり、途中の期間にはシェラブツェ大学の大学生たちが旅に同行してくれたからである。一日のスケジュールがひとしきり終わって夜を迎えると、自然とブータンの学生たちやガイドさんたちとのトークが始まる。昼間の会話と同じように、彼らはものすごい量の冗談をいい、嘘なのか本当なのか判断に苦しむようなおかしくも楽しい話をする中、時折真剣な話題を織り交ぜてきた。私はこの時にブータンの人々の人生観と出会った。

宿となる公民館に到着し、公民館の真ん中でへとへとになるまで踊ったある日の夜のことであった。ダンスのほとぼりも覚め、公民館の軒下で涼みながら数人同士の学生で話していると、一人のブータン人学生はこのように言った。「僕たちは絶対に死ぬ運命にある。だから、みんなで一緒に踊って、今を楽しく幸せに生きようとするんだ。」

年下の男子大学生の言葉だ。まさか同世代の相手からこんな言葉が飛び出してくるとは思ってもみなかった。この言葉とこの言葉を語った時の彼の表情が非常に印象的だったので、会話の後、このことを忘れないようにとノートにメモをとって眠りに就いた。しかし驚いたことに、その翌日も翌々日にも、夜の語らいの中で別のブータン人から同じような言葉を与えられたのだった。

元気に健康に生活している同世代の人間が「死」の存在を感じながら、日々を過ごしていることが何よりも衝撃的だった。そして、彼らが「死」に

ついて語った後には必ず「happiness」や「enjoy」という言葉が続いたことも印象的であった。「死」を悲観的に捉えるのではなく生活の中の当たり前存在するものとして受け入れており、「死」をいわば「踏み台」として、今ある人生を精一杯に楽しもうとする姿が私の目に眩しく輝いて写ったのだった。

ブータン人のこの人生観は、一体どこからやってくるのだろうか。ブータンの人々とともに過ごした生活を通して、私なりの視点で考えたことを述べていきたいと思う。その際、ブータンの男子学生から与えられた言葉の二点に着目した。一つ目は「みんなで一緒に」という点、もう一つは「絶対に死ぬ」という点である。

私がブータンの人々と行動を共にしてよく感じたことは、何かを共有する姿勢が非常に強いということである。これは「みんなで一緒に」という点に繋がるものだ。小腹が減ると彼らは決まって一緒にいる人数分のお菓子を用意し、当たり前のように「はい、これ君の分ね」と渡してくれる。誰かがお菓子の袋を開けると、そのお菓子は輪の中心に置かれるか順番に回ってくるかのどちらかで、少なくとも私は、この期間中にブータン人が自分ひとりで何かを消費する場面には出会わなかった。また、何か面白いもの・綺麗なものを見れば目を輝かせながら「見て！」と周りの人を呼び、「素敵でしょ？」と声をかける。物資だけでなく、そこにある何かいいもの、いい感情をも共有しようとしているのだと感じられた。

あるときブータン人のひとりが仏教における輪廻転生に関して、「現世で行った良きことが悪しきことを上回れば私たちは天国に導かれて、来世は人間に生まれ変わることができる。だから私たちはいいことを分け合うんだよ。」と教えてくれた。そのときは純粋に、「ああ、だからいろんなものを共有しようとしてくれるんだ。」と思ったが、今は宗教上の考え方だけがそのような行動を引き起こしているのではないと考えている。なぜなら、ひとつひとつの行動を行うのにいちいち来世の生まれ変わりについて考えているとは思えないからだ。おそらく日々の生活の中で、先人たちによって「共有する」という行為が当たり前を与えられてきたことで、いいことを共有することの素晴らしさ・喜びを知り、自然とその姿勢が刷り

込まれていったのだろう。彼らの行動・生活スタイルは仏教をベースとしながら構築されつつも、仏教には依らない素直な気持ちから周りに対する優しさが生み出され、喜びや幸せを分け合う姿勢が生じているのではないだろうか。

次に「絶対に死ぬ」という視点が何に依るものであるのかを考えたい。私は、その一つに仏教の存在が大きく影響を与えていると考えている。ブータンに滞在している間、何度もお寺を訪れる機会があった。その場にいた老若男女、誰を見ても真剣な面持ちでお祈りを行い、想いを込めながら賽銭を供えていた。寺に入ると、ブータンの学生たちがお祈りの方法やそこにいらっしゃる Buddha について丁寧に教えてくれた。その間、彼らはずっと真剣な目をしていて、その表情を見ると、日本で実感することの難しい「信仰心」というものを強く感じられて仕方がなかった。仏教には輪廻転生の考えがあり、前世・現世・来世の姿について因果が信じられている。仏教が人々の心に常に存在しているとすれば、「生」や「死」というものとの距離も自然と縮まることは想像に難くない。

しかし、「絶対に死ぬ」という考え方が仏教のみに由来するとは考えていない。なぜなら、私はブータンでの生活の中で、実際に「死」との距離が近いと感じたからである。その理由に大きく3点が挙げられる。第一にインフラの状況、第二に衛生環境、第三に医療体制である。日本ではそうそうお目にかかれぬような土砂崩れがブータンの道路のいたるところに存在していた。ブータンの道では対向車と出会った際、道幅スレスレのところですれ違うことも多いが、車の30cm横は数百～数千m下に急な溪流を見ることができ崖であることもあり、実際にヒヤリとした場面が何度かあった。また、衛生面については日本との格段の違いを感じた。基本的に水道水を飲むことはできないし、その水が目に見えて濁っていることもある。路上には牛による大きな「落し物」があちこちに存在しており、踏んでしまうこともしばしばで、そのままの靴で色々なところへ足を運ぶことになる。日頃から免疫力が鍛えられるかもしれないが、衛生管理をすることで防ぐことのできる病気も数多く存在するだろうというのが正直な感想である。さらに医療に関して言えば、医療の

質について問う前にまず医療が提供される数、すなわち病院そのものの数が圧倒的に少ないと感じた。救急車とすれ違うたびに、この救急車が向かう先の病院はどこまで行けばあるのだろうかと思われた。伺った話によると医師や薬も不足しているようで、ある疾患が治癒に至るまで十分な治療を継続的に受けることは極めて難しいだろうという印象を受けた。このような状況を考えると、若者がブータンで「死」を感じる頻度が日本での頻度よりはるかに多くなることは自明であろう。

では、なぜ日本ではその人生観に出会うことがなかったのだろうか。前に述べてきたことを踏まえると、何かを共有する習慣・死を自覚する場面が少ないことが理由に挙げられる。時代の流れと共に個人の存在やプライベート空間が重視されるようになり、同じ家で生活する家族とでさえ時間・空間を共有することが少なくなった。一番身近な人とであっても共有する機会が少なくなれば、何かを分け合おうとする意識が生まれにくいのはごく当たり前のことだ。また、日本では若者が死の危機に瀕することは稀であり、親族などの他人の死を間近で目にすることも少なくなった。そのような状況下では、自分の将来が当たり前存在するような錯覚に陥りやすいと考えられる。私の感覚的な判断になるが、日本人の若者は将来に重きを置いており、ブータン人の若者は今に重きを置いているように思われる。日本人はいずれ来るはずの将来のために今を過ごすか、いつまでも続くはずの今をなんとなく過ごすかのいずれかである傾向が強い一方で、ブータンの若者は、いつ終止符が打たれるかわからない人生の今というこの一瞬を生きているように見受けられた。そのような彼らの姿や言葉から、私は「今」という時間の尊さについて気づかされ、今この時を生きていることにありがたさを感じた。

ブータンは国民幸福度を示すGNHで97%の人々が幸せだと答えたことで、「幸せの国」として知っている人も少なくないだろう。しかしながら、一般的な日本人の尺度をもってすれば、決して「満ち足りた豊かな国」ではない。このことは、彼らを感じている「幸せ」が誰かから形として与えられたものではないことを示していると思う。つまり、彼らは幸せを受け取っているのではなく、能動的にそれを生み出しているのだ。「死」の存



写真1 ようやく見つけたコマ（ブローチ）



写真2 野生のヨナグニサン（野蚕）



写真3 彼女の子どもたちは全員村を出て行った



写真4 9月7日 モンガルからセンガルの山岳道（標高3000m近く）で土砂崩れが発生。道路が完全にふさがれた



写真5 パロ国際空港の国王夫妻の写真



写真6 ブータンハイウェイ



写真7 交通安全と事故の犠牲者の冥福を祈って



写真8 一番好きな Radhi の風景



写真9 思い出の1枚



写真10 ヒルなどが潜むぬかるんだ道を素足にサンダルで登校する逞しい子供たち。



写真11 標高3000m付近で見かけた青い実をつける植物



写真12 カンルンの小学校 (アーチェリーの練習)



写真13 カンルンの職業訓練学校

在により今を生きていることの素晴らしさを知っているからこそ、この一瞬を楽しく幸せに過ごすとする。そして、生み出した幸せをみんなで分かち合っている。私が見たブータンはそのような国だった。

農村部が広がり伝統を感じる家屋が多く存在するブータンも、ほかの国々と同じように急速に都市化が進んでいる。今後インフラは整備され、医療も必ず発展を遂げていこう。かつて日本でもそうであったように、人々は発展の恩恵を受け、きっともっと現代化した生活が当たり前になっていくのだと思う。しかし、たとえどれほど国の環境が変わったとしても、幸せを自ら生み出そうとし、それを皆で分かち合おうする考え方、私が感銘を受けたその美しい心だけは、どうか変わらないでいてほしいと心から願っている。

4. ブータンという意識と幸せ

経済学部経済経営学科4年 福嶋千絃

1) はじめに

ブータンと聞いて最初に何を思い浮かべるか。私は、2011年のブータン国王夫妻来訪によってメディアで多く取り上げられた“幸せの国”や“国民総幸福量（GNH）”が印象深く、私たちの多くが物質的で経済的なものに対して価値を見出す中、精神的幸福を見出すという価値観の違いを斬新に感じた。その一方で、私には精神的幸福をもたらす具体的な生活などのイメージがわからず、ブータンという国は未知であった。そのような中、大学の国際交流プログラムの中にブータンという文字を見つけて迷わずこのプログラムの参加を決めた。そして、2015年8月29日～2015年9月11日にかけてブータンに滞在し、東ブータンの農村の現状を中心にブータンの今を見ることができた。これから、ブータンで印象に残ったことについて考察も含め述べていきたい。

2) 過疎の進行

まず、東に行くにつれ人の数が少なくなり明らかに若者の数が減っていったことが印象的であり、過疎を強く感じた。実際にラディ村の農家を訪れた際、家にはおじいさん、おばあさんしかお

らず彼らの子どもは全員村を出てしまったという話をうかがった（写真3）。ラディ村では放棄田も見かけた。一年前までは、管理されていた棚田だったと聞いていたが、私達が訪れたときにはすでに荒れ放題の放置田となっていた。また、ブータンでは2020年までに人口の4割が首都ティンブーに集中すると予測されており、これはかなりのスピードで過疎が進行しているといえる。荒れ放題の棚田を目にしたことで当初抱いていた、過疎とは程遠い昔の日本のような農業国というイメージと実際は異なり、過疎という問題が国の発展レベルは違えど日本と同様に問題になっていることが興味深かった。

3) 開発と自然

次にブータンで強く印象に残っていることは、東西の移動の際に雨期の影響で土砂崩れが多発し、道路がふさがれてしまったことである。ブータンには東西を結ぶ主要幹線道路は一つしかなく、ひとたび土砂崩れや自然災害が生じれば途端に交通はストップしてしまう。ただでさえ十分でないインフラの脆弱性を雨期の時期に訪れたからこそ身をもって強く感じた（写真4）。その一方で、自然保護を国全体で推奨しているというラディ村の村長の話が頭に残っており、道中でも自然保護の看板を何度か路上で見かけた。そのことからブータンでは、自然環境に対する意識が高いことを感じた。現在のブータンには豊かな自然がまだ多く残っている。ただただ自然を手つかずで残すのではなく積極的に自然環境の保全のための管理を進め、今後急速に進むであろう脆弱なインフラを含めた都市の開発と対立関係ではなく協調できるような環境保全、都市づくりを進めていくことが理想ではないだろうか。

4) ブータンという意識

最後に、ブータンという国を訪れ最も印象に残ったことといえばブータン人の文化や伝統を大切にする姿、ブータンという国に対する意識である。まず、私はブータンのパロ空港に降り立ったとき、最初に見た空港入り口にあったブータン国王夫妻の大きな写真を見て驚いたことを覚えている。その日以降も初日から最終日まで、土産屋やレストラン、ホテルまでどこの屋内にも必ずと

いっていいほど現国王夫妻や国王一家の写真が飾ってあり目にしない日はなかった（写真5）。また、ブータン人に国王夫妻の写真を飾ることに抵抗はないか、と尋ねたら抵抗はなく、国王夫妻に対しても憧れや尊敬の念をいただいているというポジティブな答えが返ってきた。文化や伝統という意味では、シェラブツェ大学の学生を初め、バルサムの高校生がダンス、歌、楽器演奏を披露して下さる機会があった。それが素晴らしいのはもちろんであるが、それらはステージの上だけではなく、ラディ村のコミュニティーホールやバス、トラックで移動中にも突発的に歌やダンスが始まったりした。同様に、私たちが訪れたラディ村の小学校でも小学生が私達のために伝統的な歌やダンスをその場で披露してくれた。彼らの日常の中に伝統的な歌やダンスが存在しており、触れる機会も多い。そして、それを楽しんでいる。しかし、決してアメリカやアジアのポップカルチャーを知らないわけではないし、伝統的な歌やダンスと同じレベルでポップカルチャーを嗜んでいる様子であった。また、ブータンの大学では卒業試験に際してブータンマナーの試験が必須という話も聞いた。そこからも伝統を重要視していることが明らかである。

ブータンという国自体、比較的新しい国であり、様々な民族が暮らす国なのにブータンとしての伝統や意識が強いことに驚いた。ブータン人の話で、ブータンは中国とインドという大国に挟まれているという話が何回かでてきた。このような地理的状況もブータンの人々にブータンというアイデンティティを意識させる要因の一つになっているのではないだろうか。

5) さいごに

今回の滞在では実際に、ブータンの人々と交流することを通して表面的な面だけではなくその内側にも少しは触れることができた。また、病院や学校といった日常も垣間見ることができ、とても有意義な滞在であった。その中で、改めて重要なキーワードであるブータンの“幸せ”を考えてみると、渡航前とはその印象が私の中で少し変わっていた。ブータンではすべてが充足しているわけではなく、今は発展の過程の中で変化している。これは、決して物質面の話だけではなく精神面で

も同じであり、話をすれば同じような悩みを抱えていることも多々あった。ただ、そこで感じた大きな違いはメンタリティーの部分である。往々にしてブータンの人々は“肯定的”であったように感じた。そして、その源泉というのが今という一瞬を大事にする生き方である。今を楽しく生きるという考えの積み重ねが、ブータンが“幸せ”といわれる所以なのだと今回の滞在を通じて感じる事ができた。

5. ブータンで学んだ「幸せ＝平和」

農学部食料・環境経済学科3年生 犬飼亜実

1) はじめに

初めてブータンへ行って感じたことは、空が広いということ、見渡す限り一面が山であるということ、まだまだインフラ整備と衛生環境が不十分であるということ、人がやさしいということ。そしてそこで気がついたことは、ここへ来てからストレスフリーになれたということ、そもそも“不十分”とは何なのかということ、人からやさしくされると自分もやさしくなれるということ、環境と教育と人柄の大切さ、だった。わたしは大学に入学するときに自分で1つ決めたことがある。もともと国際協力に興味があったので、大学生のうちにできる限り多くの国へ行き、たくさんの異国文化に触れ、たくさんの人と話し、自分なりの国際協力とは何か、将来自分にできることは何か、わたしたちが感じる本当の幸せとは何か、を見つけること、そして自分を見つめなおし、自分を知ること、である。大学に入学してから今まで、合計17か国を訪れたが、このブータンの渡航が自分に1番大きな影響を与えた旅となったように思う。

2) 環境

ブータンはヒマラヤ山脈南面の、周りを中国とインドに囲まれた九州くらいの大きさの国である。8/29（日）ブータン西部に位置するParo空港に降り立った時、もはや標高は2,235m。これがブータン唯一の（国際）空港？と驚きながら歩いたことを覚えている。空港の建物はブータンの伝統ある造りをしており、その隣には大きな国王夫妻の

看板が出迎えてくれた（写真5）。そこから首都の Thimphu まで向かう道のりも両側はずっと一面山々で、山に沿ってクネクネと続く1本道が「プータンハイウェイ」と呼ばれていることに感動した（写真6）。8月31日（月）～9月1日（火）の2日間にわたる東部への移動は予想をはるかに超えるものだった。JICA の人いわく、プータンにおいて南北にのびる道路は全部で4本、東西にのびる道路はたったの1本ということで、西から東への道中、危険な箇所を通りかかるたびにビクビクしながら叫び、日本では考えられないデンジャラス体験にみんなで笑った。一方で、そんな道路の近くには決まってたくさんの旗などが立てられており、プータン特有の宗教観を感じることができた。それらは事故に対する注意と交通安全の願いと事故で亡くなった人々への冥福を祈ったものであった（写真7）。今回は天候にあまり恵まれなかったこともあり、途中何度か土砂崩れや工事現場に遭遇し、数時間足止めをくらうこともあった（写真4）。しかしプータン人にとって、こんなことはもう慣れっこで、さほど驚きもしていなかった。待っている間外へ出て、同じように足止めをくらったドライバーと話したり、持っていたボールでサッカーしたり、バレーしたり、楽しんでいるようにも見えた。これが日本だったら、まちががなく日本人はイライラするだろうなとふと思ってしまった。分刻みの決められたスケジュールに追われないという心地よさを知った。9/3（木）～6（日）の3泊4日間は、Sherubtse College の学生たち5人と共同生活をした。そのとき訪れた Radhi の景色をわたしは生涯忘れられない（写真8）。昔からあんなに虫が苦手なのに、そんなことなど気にならないくらい充実した日々であった。日本の町にずっと住んでいると、「こんなところがまだ世界にはあったんだ……」と思ってしまうくらいの大自然で、ずっと続く棚田と三角形に村が並ぶ山々と自由に過ごす牛たちがそこにはあった。ごく当たり前とその大自然の中を、牛の目の前を横切り、制服の Kira や Gho にサンダルで通学する子どもたち。その田園風景によく合うプータンの家屋。農家の人がカゴを背負って歩いていく。弥生時代にでもタイムスリップしたかのようであった。自然と、この景観を守っていけないといけない気がした。一方で、耕作放棄地が所々目

立ち、人々の離農と農村の過疎化・高齢化、首都への人口集中が、もう問題になってきているのだと実感した。学生たちとの別れの後、さみしさで帰りの記憶はうろ覚えであるが、西部へ向かう道中、首都に近づくにつれて少しずつ都会になっていく風景に、わたしの中でプータンの魅力はだんだん薄れていき、田園風景広がる東部が恋しくてしかたなかった。今まで海外へ行くと、1週間もすればとりあえず一度日本へ帰りたくなるのだが、今回は全くそれがなかった。むしろ帰国の瞬間が近づくにつれて、帰りたくない、東部へもう一度戻りたい、という気持ちでいっぱいになっていった。そこでふと思う。プータンの経済発展が進行し、外国の物資が大量に国内に入り、インフラ整備が完全に整い、道はコンクリートに覆われ、この風景・自然・環境が大きく変わってしまったら、今わたしが感じているこの魅力はどうなるのだろうか。どこまで発展すれば“十分”になるのだろうか。以前ラオスへ行った時、10年間住んでいるという日本人がこう言っていた。「ラオスはね、10年前は今よりも治安がよくて、人も皆やさしかった。でもこの10年でラオスは大きく変わった。人やモノの移動が盛んになり、生活水準が向上した一方で、ガツガツした人間が増えた。犯罪も昔に比べてかなり多くなっている。」と。カネやモノが増えると、ココロは荒んでしまうのだろうか。いつも途上国の発展において考える時、自分の中で毎回答えが出ない問題にプータンでもまたぶつかった。プータンの未来を「幸福の国プータン」として守っていくことの大変さと重要さを考えさせられた。

3) 人柄

そんな2週間の旅の中で、わたしが1番印象に残っているのは、プータン人の人柄である。日本人は初めましての人と出会うとき、多かれ少なかれ人見知りをする。東南アジアへ行った時、タイやベトナムの人のフレンドリーさに驚いた。それはホンネとタテマエのタテマエに近いもので、タテマエとしてのフレンドリーさに感じられた。一方プータンの人たちは、初めは日本人と同じように人見知りのような距離の取り方をしていたが、その根本にある相手の見方が日本人とは違うように感じた。共同生活1日目の終わり頃、わたしは

ブータンの学生たちとうちとけた。対日本人では今までなかった感覚であった。ブータンの人はよく冗談を言うてくる。人と話すことを好む。なんでも分け合う。伝統文化を大事にしている。よく食べ、よく笑う。親しい友達をブラザー・シスターと呼ぶ。人と人との距離が近い。惚れやすく、恋に落ちやすい。“Love you”を“See you”のような感覚で使う。人と関わることを好む。わたしの考えであるが、これはブータン人が初対面の相手に対して、まず相手を肯定的にとらえ、相手に対して興味・関心を持っているからではないかと思う。道端を歩く小学生にバスから手を振ってみると、ちょっぴり照れた感じでみんな振り返してくれた。訪れた小学校の子どもたちもわたしが教室に顔を出すと、1年生はきゃーきゃー騒ぎながら中に呼んでくれた。けれど、特に向こうから話しかけてくるわけでもなく、興味津々な様子でじっとこっちを見つめながら楽しそうに様子をうかがっていた。彼らの教室では、大きな机を4～5人が一緒に使っていたことが新鮮であった。5年生は静かに座っていたが、こちらをじっと見つめ、何か質問をすると照れくさそうにしながら答えてくれた。帰り際に6年生から「ノートに名前を書いて！」とノートを渡され、びっくりした。一方で、今の日本人はどうだろうか。人と人との距離が少し遠すぎはしないか。帰国して人の恋しさに気がついた。友人でも写真を撮るときあの距離感。少し手が触れてしまったときのあの気まずさ。日本人の国民性を否定しているわけではない。わたしは、日本人は親切で真面目でとてもいい人たちだということを知っている。けれど、集団社会から離れ、個人社会になりすぎているように思う。他人との関りを避ける傾向が強まってきていると思う。電車に乗ると皆一様にスマートフォンの画面に向かい、誰とも目が合わない。初対面の相手に対して、相手をさぐりながらタテマエで話す。知らない人にニコリとはしない。家の中にもって1人でゲームに没頭する。ネット上では饒舌に語れるのに、対面ではコミュニケーションがうまくとれない。ちょっとさみしすぎはしないかと感じた。ブータンでは国王以外は苗字を持たない。それはFamily Nameを持つことで家という囲いができ、自分の家と他の家とで争いが起こるのを防ぐためだと聞いた。彼らは「個人」であるが、「集

団」で生きているように見えた。ある日、農家を訪れた際、道端にいた牛を見てわたしが、“Beef”と冗談を言ったのを、ブータンの学生に指摘された。彼はわたしの手の甲をちょっとつまんでから、こう言った。「僕たちはベジタリアンなんだ。あみ、今つままれて痛かったろう？牛たちが人間の食用として殺される時、この何倍の痛みを味わっているか想像できるかい？僕には生き物を殺すことなんかできない。どんなに小さな虫でもね。」それを聞いて、欧米のベジタリアンなどの多くは、自分の健康のために動物性のもを食べないが、彼らは根本から見方が違うことに気がついた。また、ブータンの男子学生が、誰に対しても“I like you”、“You are so beautiful”と言っているのを日本人はどう思うだろうか。日本人はそんな簡単に人を好きにはなれない。一見、軽くてチャラいやつにしか見えないが、“きらい”と言われるより“すき”と言われる方が、何事もよくなるとは思えないだろうか。例えば、道を歩いているときに、不注意な人がぶつかってきたとする。その日の自分の気分もあるが、一瞬イラッとしてしまう。けれど、ぶつかってきた相手が心から何度も謝ってきたら、そんな気持ちも消えるだろう。そこでもし、相手がチッと舌打ちをして捨て台詞をはいたら、自分の中で嫌な気持ちが消えなかっただろう。かける言葉1つで相手の気持ちは変えることができる。わたしの目にはブータンの学生らがとてもすてきに映った（写真9）。

4) おわりに

何がその国の国民性を作るかという、環境と教育であると思う。未開の大自然が残るブータンと、物であふれかえる日本では環境が違いすぎる。けれど、一緒に過ごした時間はたくさん共感できることがあった。所属学科のある教授が「愛は武器だ」と言っていた。わたしはブータンの武器はGNHだと思う。わたしの目指す国際協力は途上国を先進国にするのではなく、1人でも多くの人を幸せにすることだと気がついた。学生たちとの別れの時流した涙は、ブータンの学生の中で初めて味わったあたたかい感覚に別れを告げることのさみしさからだったのではないかと思う。再びブータンを訪れる日はそう遠くないと思えた。

5) さいごに

今回この2週間にわたる国際交流科目に参加するにあたって、基準や枠にはめず、何事も「自由」にさせてくださった安藤先生・坂本先生に、大変感謝します。このような経験が学生時代にできて、心から幸せに思います。ありがとうございました。

6. 「ブータンの展望と学生」

総合人間学部2回生 田中咲妃

1) はじめに

以下は、2015年度京都大学国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」への参加により、受講を決意するまで地図上でのブータンの位置すら知らなかった私が、現地では様々な人々に出会い、生活を垣間見て、感じたことや考えたことをまとめたものである。

西ブータンから入国し、片道2日間のバス移動を経て東ブータンを訪問するという今回の研修は、各地域の文化の違いや景色の美しさを楽しむことができたばかりでなく、一方では舗装されていない道路を長時間移動するために体力を、また度々の土砂崩れによる足止めで気力を奪われることを体験する良い機会であった。加えて、風呂場やトイレの整備、学校数や医療機関の設備など、都市部から農村地域へ進むほど生活水準が低下していくことを実感した。

約2週間の滞在中、ブータンが様々な問題に直面していることがわかった。特に地方の過疎化問題が深刻なようだ。しかし同時に交流を通して、ブータンには、特に将来を担うブータンの学生たちには、問題に立ち向かっていけるだけの素養があるように思えた。

2) 自然環境保護と災害対策

ブータンで目にした棚田や雲海の絶景は忘れることができない。豊かな緑の中を野犬や牛が自由に闊歩している景色、そしてその横をすり抜けるようにして道を行く車や通学中の子供たちが作り出す光景は日本では見慣れないため少し戸惑った(写真10)。目新しいものは植物にも多くあった。標高およそ3000mの地点で見かけた青い実をつけた植物は、ブータンの固有種であり、実はグレー

プのような味がするのだと現地の女性ガイドに教えてもらった(写真11)。一方道端では、ブータン全土にわたって道端には坂本さんによればとても勢力のある外来種だという植物が確認できた。現在は豊かな自然を誇っているブータンだが、今後は固有種と外来種の関係性の展開や国が発展していくうえで如何にして自然環境を保護していくかといった問題が今まで以上に迫ってくるだろう。現在、法律で森林確保のために焼畑が禁止されているというが、こういった規制が実情どれだけ守られているのか、それらは本当に有意義なものなのかを慎重に見極めながら進めていくことが求められるだろう。

今年はブータン隣国のネパールで大地震があった。ブータンも地震被害に遇い得る位置にある。しかし、見かける家屋は上の階層ほど大きさが増すという極めて地震発生時においては非常に危険な構造をしていた。特徴ある景観は確かに美しかったが、万一の際に人命を失わない為には、これからきちんと伝統家屋の維持と耐震の妥協点を探っていく必要があるだろう。また、昨今地球温暖化の影響で氷河湖の決壊が危ぶまれている。この対策も急を要している。

3) 農村地域の過疎化、首都への人口集中

ラディの棚田はとても美しかった。しかし、そこから車で数十分のトクシマンでは耕作放棄地が目立った。現在、ブータンでも日本で耳慣れた「過疎」や都市部への人口集中の問題がかなり問題視されている。人口の25%が首都ティンブーに集中しており、さらに2020年には推計で40%に達するだろうといわれているという。日本の東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉の1都3県)への人口集中率は、2010年の国勢調査によると27.8%であるから^(注16)、40%とは途方もない値であることがわかる。しかし、JICAブータン支所の高野翔さんから伺った話によれば、1950年代以降の高度経済成長期を通して都市部への大規模な人口流出が起こり地方の過疎化が始まった日本の状況に比べ、ティンブーには増えゆく労働人口を十分に吸収出来るだけの雇用がないという。このままでは都市部で失業問題、住環境問題が深刻化しそうだ。

都市部への人口流出が進む理由はいくつか考え

られる。まず、道路環境の悪さが挙げられる。農村地域では道の整備が進んでおらず、人や物資の運搬は困難だ。生活は都市部と比べて不便である。移動でタイヤの大きなトラックを使用したこともあったが、それでもタイヤがはまり、途中から徒歩へ切り替えた。暮らしの不便は農村地域から人が離れる原因の一つである。加えて、国を横断する唯一の道路は、土砂災害によってとても危険な道となっており、一度西の都市部へ移動した人々をその場に固定してしまう。

ティンパーやタシガン、ラディでは医療機関を訪問した。ラディで訪問したのはBHU（Basic Health Unit）と呼ばれる保健所のようなところであった。地方ではまずBHUにかかり、そこで対処できなければ都市部のより大きな病院へと搬送される。坂本さんによれば搬送途中で亡くなる方も多いいという。万一のときを考えれば、病院施設の整った大きな町へ住みたい、より安全な町に家族を住まわせたいと考える人々も当然いるであろう。これも地方から都市部への人口流出の原因となっている。

ブータンでは、獣害によって農業が大きな被害を被っているという。交流したブータン人皆は殺生に対してかなり強い抵抗を示し、私たちにも生き物を傷つけないよう諭してきた。ブータンでは人々が殺生を嫌うあまり獣害対策も困難なのである。農業自体の不安定さに加えて獣害なども深刻であることから、農業はお金にならないという理由で若い世代から嫌われる傾向にあるという。人々の離農も、職を求めて都市部へ人口が流出する原因となる。

離農については、人々の間に農業は勉強ができなかった人がやるものだという意識、農業従事に対する劣等感が存在することも大きく影響しているようだ。都市部へ教育を受けに出て行った人々が学校をドロップアウトした場合、その大半が地方の故郷に帰ることを恥じ、たとえ職がなくとも都市部に留まるという。

以上が主に農村地域の過疎化と都市部への人口集中を促進している。約2週間の滞在を通して見聞きした問題の中で、特にこの問題については農業補助や地方開発、そして意識改革など早急に手を打たなければ日本の過疎問題よりも深刻で回復が難しい状況に陥ってしまうのではないかと大き

な不安を覚えた。

4) ブータンが抱えるその他諸問題

インフラ整備が進んでいないこと自体も問題の一つではあるが、その労働力がインド人労働者によって賄われているという事実も今後問題となってくるのではないかと思う。JICAの高野さんによれば、土木・土地整備など以前は地域の人々で協力して行っていた作業も国が発展していく中で放棄される傾向が出てきたという。実際、移動途中みかけた道路整備では作業員の大半がインド人であった。

タシガンホスピタルの訪問で、糖尿病をはじめとする生活習慣病を専門にみる診察室が設けられていることには驚いた。以前は感染性の病気が一番診療件数としては多かったが、次第に非感染性の生活習慣病を患う人々が増えてきており、その対策予防が急がれている。

食料自給率についても、3日間一緒に活動したブータン王立大学 Sherubtse College の学生の話によれば、ブータンは特に穀物自給率が低く、お米はインド産のものが安価で美味しいと人気が高く自給率が思うように回復せず困っているという。

最後に、これは問題にはなり得ないことかもしれないが、最近ブータンではベジタリアン人口が増加傾向にあるという。交流した Sherubtse College の学生のうち数名はベジタリアンだった。彼らは目の前で私たちが肉料理を食べている様子をどのような気持ちで見つめていたのだろうか。そして普段、友人でも肉料理を平気で食べる人がいるなかでどのような思いで生活しているのだろうか。ベジタリアンとそうでない者が併存する社会で、争いが起こることはこれまでなかったのだろうか。今後も何事もなく平穏に社会は回っていくのだろうか。

5) ブータンの学生たち

この研修では、ブータン王立大学 Sherubtse College を訪問して学生たちと交流したことに加え、二つの小学校や障害者向け職業訓練学校なども訪問した。小学校訪問では、英語で理科や社会科学などの授業を受け、既に英語を道具として使いこなしている子供たちに圧倒された。また、クラブ活動では先生たちとともに国技アーチェリーや

伝統舞踊などに積極的に取り組んでいる様子が見られた(写真12)。教育水準の高さのみならず、教育の一環として伝統がしっかりと組み込まれていることに感服するばかりであった。職業訓練学校では、機織りや絵付けの練習を繰り返し行う生徒たちの作業風景を見せてもらった(写真13)。今回の訪問はとても短時間のものであったために、実際私たちが見た現場は表面的なものに過ぎなかったのかもしれないが、人々が耳が聞こえない、言葉が話せないなどのハンデキャップを越えた自立を見据えることができる環境も既に整えられていることには感動した。

Sherubtse College 訪問では、歓迎の催し物として学生たちにより歌や踊りが披露された。この歓迎会のみならず、我々の受け入れは学生たちが主導して行ってくれたという。歓迎会の翌日にはある村の教育機関を訪問させてもらったが、これもある学生が手配してくれたことで実現したものだったようだ。また、私が日本の現状と将来について、とても不安なことが多いという話をしたとき、Sherubtse College の学生は「それなら今君が社会を変えていけばいいのさ。」と言った。彼らには、若い世代、すなわち自分たち一人一人が動き、社会を変えていくものだという意識があるようだ。彼らのような頼もしい学生がいるブータンを羨ましく思い、自分の中に何となくあった「若いうちは上の言いなり」という意識を恥じたのを覚えている。ブータンの大学では学生たちが主導する場面が多々あるらしく、こうして生まれた自主性が、ブータンの未来を明るくしていつてくれるように思う。

ブータンの東大といわれるブータン王立大学 Sherubtse College に関しては、首都ティンブーから車で2日間かかる東ブータンに位置していることそのものが今後ブータン社会に貢献するかもしれない。これから首都に人口が集中していく中で、都市での暮らししか知らない子供たちが増えていくと予想される。そうなったときブータン社会がどうなってしまうのかと JICA の高野翔さんが不安を吐露されていた。しかし、大学進学のために東ブータンへ行き、農村の暮らしぶりを見て問題意識や改善意識を持ち、将来行政などを担っていつてくれる子供たちがいると考えれば、明るい未来が見えてくるだろう。今回交流した学生の中

にもティンブー出身者がいたが、彼らが地方の現状を見るきっかけを Sherubtse College は提供してくれるのだ。

6) おわりに

約2週間の滞りで、日本や諸外国と同様にブータンも様々な問題に直面していることがわかった。しかし、同時に将来活躍してくれるであろう頼もしい学生たちにも出会うことができた。現地研修期間はおよそ2週間と短かったが、その間ブータンの現状を目にしながら日本についても思いを馳せる場面が多々あった。このような好機を得たことに心から感謝している。農家訪問をはじめ、訪ねた先では菓子類やお茶・アラとともに温かいもてなしを受けた。病院や役場の訪問時にはどのような要望にも気軽に応えていただき、本当に沢山のことを学ぶことができた。どの場面でも、快く受け入れてもらい、何でも自由に質問させていただけた環境が印象深かった。ブータンで関わった全ての方々、安藤さん、坂本さん、そして今回共に初めてのブータンを経験し感動を共有した参加学生の皆さんに、今一度感謝の意を評したい。

注)

注16) 内閣府『地域の経済2011』補論1.「戦後の首都圏人口の推移」より <http://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr11/chr11040101.html> (Accessed on Sep.20th, 2015)

7. 霧の向こう側で得たもの

総合人間学部2回生 新川広樹

1) 道

この約12日間の旅の中で最も時間を費やしたのは移動であった。往復約丸4日、日本ではまず考えられない移動時間である。そしてその時間の中で私は非常に多くの物事を観察できた。草花の種類や木々の生え方の地域的变化、天候や雲の高度による違いをはじめとして、山と田畑の位置関係、インド系労働者の住環境、人々の顔立ちなど幅広いことを自分の目で確認できたことは非常に興味深い収穫である。そしてまた、9月7日のトゥ

ムシン・ラ付近の土砂崩れによる通行止めの際には、地域住民の木材の運び出しや運転手たちの協力関係、工事の待ち時間の過ごし方などから彼らの生活の中の精神性などが垣間見えたように思う。

しかしながら、この移動時間こそがブータンの東西格差を生み出しているのも事実である。非常に主観的ではあるが、タシガンからの帰路、西に向かうにつれて街の規模や商業施設が増加し、道路の質も向上していく気がした。そしてまたホテルや食事処の質も西部の方が外国人に適しているように感じられた。これらのことは外国人旅行者の入りやすさにも影響を与え、旅行者は将来的にも西部にばかり集中するだろうと思われる。この先インドやヨーロッパからの援助金から独立するにつれて、ブータンでは外国人旅行者からの外貨獲得が重要になってくる。その時、外貨を求めて西部の観光地域へ流入する農民は増える一方になるだろう。そしてその農民たちの殆どは、パロ、ティンブー、プナカなどの観光地から遠い地域の農民であるはずだ。実際、ラディでは目立っていた耕作放棄地がパロ、プナカで認められなかった。この理由は恐らく、パロ、プナカのインフラは整っており他の地域に移住する必要性がそこまで大きくないから、そしてまた、パロやプナカは観光地であるため完全に離農せずとも兼業できる職業に幅があるからだと思われる。以上の事柄より、東部の過疎はますます進み東西格差が広がって行くのは明白だろう。

これらの問題に対し、打開策として期待できるのは近年タシガン近くに開設されたヨンブ・ラ空港の充実化だろう。外国人旅行者が労を要せずにタシガンまで入れるようになれば、東部はタシガンを中心に発展することができるのではないかとと思う。そしてまた、各地方の村々にホテルやバンガローを建てるなどして外国人を受け入れる体制を確立すべきである。わざわざ大規模な施設を作る必要はないが、最低限外国人旅行者が一宿一飯を得られる施設が必要である。そして可能であれば、それらの宿泊施設は地域の有力者ではなく国によって建てられ、地域住民の持ち回りによって管理されるのが望ましいと思う。

以上より、私はタシガンや、可能ならば他の地域の空港開設及びその拡充を切に願う。旅行者の

移動時間が短縮できれば農村地域の観光業も発達し、地域住民は自分の土地を手放さなくとも観光業と農業を兼業できるようになるのではないだろうか。各地域で何が観光客の呼び水になるかは知らない。がしかし、それを考える前に観光客が入りやすいような地域開発をし、ブータン東部を旅行者にとってより“近い”ものにすべきだと思う。そして地域住民が旅行者とのふれあいの中で自分の地元の新しい魅力に気づきそれを磨くことができれば、今までとは異色な観光地が出来上がると思うのである。

2) 命と幸福

以前日本で牛と触れ合った際、多くの牛は牛舎の中に入れられ、放牧されているものも狭い牧場の中で生活しており窮屈そうであった。しかしその一方でそれらの牛たちの目は非常に利口そうに見えた。今回ブータンでは多くの牛を目にする機会があったが、彼らの目はそこまで利口そうではなかった反面で、とてもんびりとした目をしていて、犬に関してもそうだ。ブータンの犬、特に農村部の犬は日本や東南アジアの犬とは異なり、人間に対して卑屈ではなく堂々と自分の居場所を主張していたように思う。これらはブータン人が彼らをおある意味対等な生命として扱っていることの結果なのだろう。この対等性が輪廻信仰に基づくものか、あるいは身近に犬や牛がいるから生まれるものなのかは分からない。しかしこの命の対等性を持てるだけの精神的余裕があるということに、ブータン人の幸福の一端がある気がする。

そしてもう一つ、ブータン人の幸福の根底にあるものは、彼らがことあるごとに言っていた「いつ死ぬか分からないのだから今を楽しめ。」の考え方であるように思う。実際、彼らがどの程度他者の死に触れる機会があるかは分からない。しかし死を生命の流れの一つとして身近に捉え、目の前にある生を真摯に生きようとするその生き方が、今を「幸福だ」と感じることでできる感性を育てているのではないだろうか。我々日本人は日々の些細な物事に不満を覚え、それが積み重なって「不幸だ」と感じるが、それでもなおその「不幸な」生活を惰性で続けていくことが多いように思う。しかしブータン人の持つ日々の問題は医療設備や道路環境など、多くの日本人が持つ日

常的問題よりも急を要するものが多い。それなのに彼らが笑顔で日々を生きているのは、彼らのもつ「いつ死ぬか分からないから、今を楽しむ」という考えに依るところが大きいのではないか。日々の障害に不満を垂れるより、今を楽しむために「足るを知る」という姿勢が、彼らの持つ幸福の根底にあると思うのである。

しかしまたその一方で、彼らの肉食や屠殺に関しては少々の違和感を覚える。屠殺を海外に頼り、自分たちは肉食を続けるという姿勢が奇妙に感じられるのである。古今のブータン人の肉食及び屠殺の状況については、「ヒマラヤ学誌 No.15 P.72-81, 2014 宮本万里：現代ブータンにおける屠畜と仏教一殺生戒・肉食・放生からみる「屠畜人」の現在について―」に詳しく書いてある。要約すれば、主に西部地域ではかつて屠殺を「チベット人」「ムスリム系労働者」「高地民」「無謀な若者」など、自分たちからは遠い不特定の他者に頼んでいた。そしてまた中東部のメラ・サクテン両郡やプナカ、ワンディボダン県などでは村民自身の手で屠殺が行われていたようである。

しかし最近になり、ラム・クンザン・ドルジという名の高僧によって大規模なツェタ（放生）が2000年にインドで、2001年にブータンで行われた結果、ブータン国内で屠殺に対する忌避感が強まり各県で自主規制されるようになった。そしてそれに伴い、それまで畜産法という形で国内での屠殺手段の法整備を進めていたブータン政府も、2001年に家畜法を改正して、年内の吉日（年間計2ヶ月間以上）の屠殺と畜肉の輸入や販売を全面的に禁止した。そしてそれは国民の屠殺への忌避感をますます増大させる要因になった。その結果、ブータンでは屠殺を国境を接するインドのアルナーチャル地域に頼るようになり、国内市場で流通している牛肉の75%、豚肉の97%（Nidup 2011）が輸入製品になったようである。（以上が要約箇所）

これらの屠殺忌避と肉食とは三種浄肉の考え方により共存可能だと宮本さんは書いている。しかし私はこれを宗教的問題としてだけではなく、政治的問題として危惧している。この屠殺の問題然り、経済援助や水力発電所の問題、道路等インフラ整備の問題然り、この国はあまりにも他国、特にインドに精神的、経済的に依存しすぎているの

ではないかと思う。確かに、日本もアメリカに依存しきっているとの指摘もあるかもしれない。しかしこれから先、発展途上国から抜け出して欧米とは異質の先進国、幸福を追求する先進国になる可能性を秘めているこのブータンが、不都合な部分を他国に任せ、見せかけだけの幸福を飾り立てるだけの国にならないかが心配なのである。

3) 影響と依存

今回の旅の中で、私はブータンがチベットから非常に強い文化的影響を受けていることを何度も実感した。街中の至る所で目にするマニ車、ブータン人男性が着用しているゴー、寺院の壁画によく描かれているプルバやヴァジュラキラなどの男女交合像（ヤブユム）、そしてトンサの博物館の説明にあった「シャブドゥンはチベットから逃げてきた」との記述からも明らかである。しかし今、ブータンが依存しているのはチベットや中国ではなくインドである。学生の主な留学先も、道路などのインフラ整備の労働者も、そしてその援助金の多くも、インドに頼っているのである。チベットを征服し、弾圧した中国と親しくするよりも、もう一方の大国であるインドの影響下に入る方が得策だと判断した気持ちはわかる。けれどなぜ中国とインドの間の緩衝国としてうまく立ち回り、両国から一定の距離を取ろうとしなかったのかが疑問に思った。

そしてこれは戦後の日本にも言えることである。中国と距離を置き、アメリカの顔色ばかり伺う政治体制も、留学といえば欧米に行く傾向もブータンに酷似しているように思う。だが、日本はアメリカと国境を接していないし、アメリカから大量の労働者を受け入れていないし、人口もブータンの約181倍いる。今のブータンは文化の維持を国是とし保護に努めているが、このままさらにインド系労働者を受け入れていった時、それが可能であるのかは疑問である。この先インドの人口が増えた時、インドの貧民層が住みやすい土地を求めてブータンに移住していく可能性は大いにあり得ると思う。その時ブータン人が彼らとどう折り合いをつけて生活していくのか、どうやって「ブータン」という国、文化、そして人を残していくのか、あるいは残していけないのかに興味がある。

ただ少々話が変わるが、私はインドの歴史をよく知らないため、彼らがどのような支配体制を敷く傾向にあるのかも分からない。それゆえに、ブータンがインドの属国として虐げられることのないよう、切に願う。

4) 最後に

トゥムシン・ラの峠越えの前と後、西と東では多くのものが異なっていた。道は東に行くにつれてガタガタになり、宿泊場所はホテルだったものがいつの間にか公民館になっていた。しかし東部では、私が本で読んで知ったような気になっていた死生観や幸福観を地を持って生きている人々に会った。それらは近代の遙か以前から長いこと彼らの生活を守ってきたものであり、その中には限られた世界で人々が生きていくために必要なもの、人間という種を存続させるために必要なものが残っているのだと思う。

近代化を進める西部とそれにおいていかれている東部、これと同じ歪みは西欧とアラブ、米国と中南米、日本と韓国にも存在し、近代化した国々への羨望が現在移民やテロ、カルテルや歴史認識問題として表に出てきている。そしてまた、近代化そのものにも自然支配、唯物論偏重、短期的視点、科学技術万能主義、搾取的経済観など多くの問題が潜在しているのも確かである。それらの問題とうまく折り合いをつけるためには、ブータン人、特にブータン東部のあの自然の中で生活している人々の持つ価値観を土台に、これからの世界の展望を考える必要があるだろう。

まるで東西を分かつかartenのようだったトゥムシン・ラのあの霧は、その実、“近代化”してしまった我々がとうに忘れてしまった知恵を保つための最後のバールだったのかもしれない。そのバールを剥がしてしまうことが良いかどうか、あるいは言い換えるならばバールの向こうに隔離したままで良いのかどうかは分からないが、私はその向こうで“近代化”の持つ闇を照らす一筋の光を見た気がする^(注17)。

注)

注17) 本節には以下の文献を参考にした。

- [1] 宮本万里 2014「現代ブータンにおける屠畜と仏教 一殺生戒・肉食・放生からみる「屠

畜人」の現在について—』『ヒマラヤ学誌 No.15』: 72-81. (Retrieved from ; <http://www.kyoto-bhutan.org/pdf/Himalayan/015/Himalayan-15-072.pdf>)

- [2] Wikipedia. (2015). ブータン（人口の項） (Retrieved from ; <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC>)

- [3] Wikipedia. (2015). 日本（人口の項） (Retrieved from ; <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%B3>)

以上 2015 年 10 月 20 日アクセス

8. ブータンの農業の問題点

農学部食料・環境経済学科 2 回生 横島尚貴

私は、8 月 29 日から 9 月 11 日の期間に国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」に参加した。個人でブータンという国に旅行しようとすれば、ブータン政府観光局の規定により、観光するのに 1 日あたり 250 ドルもの公定料金がかってしまう。だが、今回のプログラムは王立ブータンツェラブツェ校との協定により行われたため、公定料金よりもかなり低い料金で参加することができた。このようなプログラムはブータンとの関係が深い京都大学でしか参加できないため、大学 2 回生で大変貴重な経験をすることができたことに感謝している。

私がこのブータンのプログラムに参加しようと思った動機としては、農学部食料・環境経済学科の学生として、日本において他産業よりも農業の重要性が低く、農業就業人口も減少しているという現状に対して、どうすれば農業が重視されるようになるのかということを研究テーマにしたいと考えており、客観的な視点からブータン農業の現状を見つめ日本と比較することで農村発展について何が必要とされているのかという問題の解決の糸口を模索したいという考えがあった。

次に、今回の実習で印象に残ったことを述べる。1 つ目は、土砂崩れによって、数時間ものあいだ、主要な東西縦貫道が通行止めとなることが、頻繁に起こっているということである。我々がブータンに渡航した時期は例年ならちょうど乾期の始まりに当たる時期であったが、今年は雨期が長引い

てしまい、最初の1週間はほとんど毎日雨が降っていた。そのため、急峻な地形が多いブータンでは地盤が緩み、土砂崩れが起りやすい状況となっていた。我々は何度も土砂崩れによる通行止めを経験したが、1番規模が大きかったのは9月7日の午前10時頃にモンガルで見た土砂崩れである(写真4)。この土砂崩れによって、まるで道路が根こそぎ下に向かって流されていた。我々が到着する前からこの復旧作業は行われていたが、午後12時30分頃までかかり、合計3時間以上はかかったそうである。仮に日本で主要道が何時間ものあいだ通行止めとなれば、忙しい日本人はすぐ腹を立てクレームをつけるであろう。だが、ブータン人は決していらいらした態度を見せず、のんびりとその工事が終わるのを待っていた。特に、我々のバスを担当してくれたドライバーのラッパさんはサッカーやバレーなどをしてむしろその状況を楽しんでいた。どちらの方がよりよい対応であろうか。明らかに後者である。日本人はこのようなブータン人の寛容な態度を見習うべきであろう。さもなくば、ストレスフルな現代社会でうまく生きていくことが難しくなってしまうかもしれない。このブータン人の対応もGNH世界一のブータンという国固有のものなのであるか。

2つ目に印象に残ったことは、ブータン学生の英語レベルが全般的に高いことである。9月2、3日にカンルンで二つの小学校を見学したが、そこで行われていた英語の授業のレベルに大変驚いた(写真14)。私が実際に見学した小学校3年生の英語の授業では、日本の高校レベルの内容が扱われ、しかも授業内容はすべて英語で話されていた。また、小学校1年生の英語の授業では、先生が1、2人の生徒を前に呼び、教室にいる全生徒の前で歌やダンスを披露させていた。これは人前で発表するための力をつけることを重視しているのであろう。音読も頻繁に行われ、英語でのコミュニケーション能力向上に重きが置かれていた。9月2日に王立ブータンツェラプツェ校で行われた交流会では、ブータンの学生が英語でスピーチを行い、会を進行させていたのだが、そのときの英語力は見事なものであった。ブータンの学生と普段交流する際も、日本の学生よりもかなり高い英会話力を見せつけられた。上で述べた小学校での英語教

育がここに生かされているのだと感じた。小学校の先生から聞いた話では、なんと幼稚園から現地語であるゾンカ語だけでなく、英語も教えられているらしい。次に、9月5日に我々のツアーを担当していただいた旅行代理店のカルマさんの、親戚の家にお邪魔したときに、ブータンの高校3年生の化学の教科書を見せていただいたのだが、それには日本の大学で扱われる内容も含まれており、また英語で書かれていた。少なくとも私は英語以外の科目を英語で習ったことがない。これらの出来事から、日本の英語教育とのレベルの違いを痛感させられたが、その違いは日本で英語は科目として学ばれ、ブータンでは他の科目を学ぶための道具として英語を学んでいることに由来しているのではないかと考える。また、首都ティンブーで見たテレビがインドの番組を映して、公用語が英語である隣国の大国インドの影響を少なからず受けているのではないかと感じた。日本が学ぶべきこととして、一部の中学・高校で導入されているオールイングリッシュの授業を、今後多くの学校で行われるようにすべきである。それが難しければ、リーディング・ライティング重視の授業からリスニング・スピーキングに焦点を当てた授業を行うべきである。授業でリーディング・ライティングに重きが置かれてしまうのは、それらが高校・大学受験で特に必要とされているからだと考えるが、もっと社会に出て実用的なリスニング・スピーキングを入試にも授業にも取り入れていくべきであるだろう。現在、世界で求められているグローバル人材育成のために、どちらが必要であるかを考慮すれば明らかである。

最後に印象に残ったこととして、ブータンの農業の問題点を取り上げる。9月3日にラディで村長から、なぜ農村から都市へ人々が離れていくのかという説明をいただいた。ラディ村から都市へと移動していく人々の数は年々増加していた。その原因として、都市での経済発展、農村での土壌悪化・自然災害、獣害などが挙げられた。都市では雇用、教育、医療施設、交通手段、商品が充実しており、農村よりも生活するのに便利である。そして、ブータンでは殺生が忌避されているため、農作物に被害を与える鳥獣を殺すことができない。これにより、獣害による農作物への被害を軽減することは難しい。次に、人々の都市流入の影

響として、特に空家・耕作放棄地の増加が深刻な問題である。我々も実際に耕作放棄地を数多く目にしたが、せっかくの美しい棚田が放置されていて残念だと感じた。ブータンの美しい棚田の景観が保持されてほしいと願うばかりである。ここで日本と比較したときの相違点は獣害への対応で、日本では獣害が起こればすぐ鳥獣は殺されてしまう。一方で類似点は農村の過疎化、耕作放棄地の増加である。経済発展の途中段階にあるブータンですでに、現在日本が抱えている問題に直面していることに驚いた。9月9日に JICA のブータン事務所を訪れた際の高野さんのお話によれば、幸せの国ブータンというのは農業があってこそのものであると言われていた。だが、現在その農業が多くの問題を抱えている。日本・ブータンの農業を再興させていくためには、農村から都市への人口流入を止め、農村に人々を呼び戻す必要がある。農村から人々がなくなる原因として、農村には仕事がない、農村に留まることが劣等感につながるといった考えがある。これらの考えを改めさせ、農業に価値はあるのだという教育を、学校で日本・ブータンの若者に施していくべきであろう。そうすれば、両国の農業の未来は見えてくるかもしれない。

9. 都市化する秘境

理学部1回生 高浦雄大

ブータンでは他の発展途上国と変わらず首都一極集中が進んでおり大変な危機的状況にある。このまま放置しておくと2020年には約40パーセントもの人口が首都ティンブーに集まるとさえ言われている。かつての日本では、東京には労働者を吸収できるほどの能力があったのに対して、ティンブーには流れ込む労働者を十分に雇用できるほどの能力が備わっているとは言い難い。そのため他の発展途上国が抱えるような都市化に伴う様々な問題が生じることは容易に想像できる。そういった労働者の多くは元は農村で農業を営んでいた人たちである。そのため首都への一極集中に伴い、農村での過疎化や放棄田の増加など深刻な問題が起こっている。元々経済規模や人口規模が共に大きくなかったブータンでは家族を第一にする

ことを前提にして経済が発展してきた。また宗教と共に生活してきたことも忘れてはならない。その家族との密の関係、また文化・宗教を尊重して生きていることが世界一幸せといわれる大きな要因なのだということが、私がブータン人と実際に接して感じたことである。人口の首都一極集中が進むにつれてその形態が壊れつつあるのである。

ティンブーに戻り気になったのは人々の服装であった。東部からティンブーに戻る途中立ち寄った村などではゴヤキラを纏っていない人を見かけることはほとんどなかったが、ティンブーでは私たちが普段着ているのと同じようなカジュアルな衣服を着ている人の割合はそれなりに高かったように見受けられた。中にはシャツと伝統衣装のキラを組み合わせて着ている人もいた。それでも通りを歩く人皆が違和感なく着こなしていた。外から入ってきたものを自国の伝統の文化とをうまく共存させているなど感心した反面、このままだと殆どの日本人が着物を自分で着付けすることができないように生活の中のゴヤキラの重要性が段々と薄れていくのではないかと不安になった。民族衣装はその民族性を示す重要な要因の一つであるので、首都の都市化に伴いこういった事態が起こっているとはブータンの民族性が少しずつ失われているという事実を表しているといえる。

ブータンでの現地研修を行って非常に驚いたことがある。その教育レベルの高さである。現地の大学生が英語をとて流暢に話すことができるということを出国前に聞いていたとはいえ、実際に話をしてみると年齢がほとんど変わらないのに自分よりもはるかに英語を上手に話していて彼らの能力の高さに驚かされると同時に自身の勉強不足を激烈に痛感した。現地の大学生と仲良くなり彼らが色々話をしてくれるのにうまく理解することが出来なかつたり私が伝えたいことをうまく英語で伝えられないことも多くあり、もう少しだけでも英語を上手に使うことができればと率直に思ったとともに、もしもっと英語が上手なら彼らとの時間をより楽しむことが出来ただろうと後悔した。途中立ち寄った商店などでも、日本とは違い英語で普通に会話を交わすことができたことから多くのブータン人が英語に慣れ親しんでいることがわかる。ブータンでは学校で英語を徹底的に教育されるのである。今回現地の公立小学校を

訪問し授業を見学させていただく機会を頂いた。そこで現地の小学4年生の英語の授業を見ると、日本の高校の授業と全く変わらない内容を小さな子供達が学んでいて衝撃を受けた。ある生徒が先生に前に呼ばれて黒板の内容の説明を求められると英語で説明を始め、感心するばかりであった。現地語であるゾンカ語の授業を除くほぼすべての授業を英語で教えているそうだ。英語はあくまで道具なのだという意識を授業を通じて教え込んでいるそうで、この姿から日本が学ばなければならないことは数多くあるだろう。また途中立ち寄った民家で現地の高校3年生の理科の教科書を見せていただくと日本では大学の学部レベルで学ぶ内容をすべて英語で書かれてあり、その水準の高さに危機感すら感じる程であった。この日本では‘スパルタ’と言われるほどの教育には欠点も存在する。ドロップアウト率の高さである。特に英語が苦手なだけで他の科目の授業にもついていけなくなるため問題となっている。ドロップアウトした人たちは農家として働くことが一般的であるため、農家は比較的下等な職業であると考えているブータン人は多い。そのため勉強をするために都市に出てきた人たちがドロップアウトしても、それが恥ずかしくて今さら農村に帰りたくないと言う人が数多く存在するようである。また学業優秀で大学まで進学した人は、日本の多くの大学生と同じように都市で働きたいと考え農村に帰らずそのままティンブーに移り住む人が多いようだ。高い教育水準は国の発展のためには必要不可欠である反面、首都一極集中の一因となっているという負の一面を持っていることも考えなければならないだろう。

日本でも多くの若者が東京圏に住みたいと考えるようにブータンの特に若者が首都ティンブーに移り住みたいと考えるのは、今回東西を移動してみてその気持ちは共感できるものがあると思った。まず一つが交通の不便さだ。今回首都から東部タシガンまで車で丸二日かかった。しかも一本ずつしかない都市間を繋ぐ国道は山を切り崩してつくった舗装されていない道路で時に転落事故が起こるような、日本で住む私たちから見ると非常に危険な道である。滞在の時期がちょうど雨期と重なったこともあり、途中土砂崩れにより道路が封鎖されてその復旧を数時間待たなければならない

ことが何度もあった。これでは一度ティンブーに移り住んでしまうと、故郷に帰るのが面倒に感じてしまうのは仕方がないだろう。またもう一つの大きな理由がその利便性である。初め私がティンブーに滞在したときは日本の基準で見ているということもあり日本の廃れた地方都市のような印象を受けた。しかし東部の田舎に行き、そのあまりの都会さに帰りに再びティンブーを訪れると私たちが人生で初めて東京の高層ビル街を訪れた時に感じるような感情と似た感情を覚えた。田舎に住む若者が首都ティンブーに移り住みたいと感じるのは自然なことなのだろう。また地方との医療レベルの差も首都一極集中の大きな原因になっていると考えられる。今回の旅でティンブーにある国立病院とブータンの地方の医療を支えるBHU (Basic Health Unitの略で分類的には日本の保健所にあたる施設であるが、その重要性は日本よりもかなり大きい)を訪ねさせていただいた。国立病院と県の病院とBHUとでは常備できる処方箋の種類や施設などが厳しく決まっており、例えば地方で体調が悪くなるとBHUの出張診療所であるOutreach Clinic (ORC)で診療を行い、そこで扱えなくなると県の病院そしてティンブーの国立病院へと送られる仕組みとなっている。特にBHUは非常に様々な場所に設置されており、地方で一次診療を担うという点では非常に優秀なのだそう。しかしティンブーの国立病院での診療を診断され、ティンブーまで山道を長時間搬送されている間に命を落とす人が多いそう。医療の充実度の差も首都への集中の一因になっているだろう。

現在では首都一極集中を避けるために様々な解決策が考えられているようである。特に重要なのは地方都市を発達させることだそう。日本でいう仙台などの地方中枢都市の建設に成功すれば、そういった都市を中心とした生活圏が形成され首都ティンブーへの一極集中は避けられるそう。これまでは西部の開発を最優先に行ってきたため、未発達の他の都市の発展を慎重に行えば、日本やドイツのように様々な都市圏で人口が分散するだろう。都市のまた一本ずつしかない都市間を繋ぐ国道の斜面整備や舗装も急務である。今回の旅路のように唯一の国道の土砂崩れによる通行不能が日常茶飯事であるような状態は重要な交通網が満足に使えないという点で経済活動を阻害して

おり、またティンブーから他の都市が遠いという意識を首都に住む人たちに刷り込み農村への回帰を阻害している大きな要素だろう。ブータン政府が掲げる自然保護との折り合いつけながら国道の整備を進め、都市間の意識距離を縮めなければならない。

今回の訪問でなぜブータン人が世界一幸せと言われているか自分なりに分かった気がする。ヒマラヤの山々に囲まれ、宗教や伝統を守り、人々のつながりを重んじ、細かいことを気にせず生きる。そしてゆっくりとした時間の中で生活をしている。そういった農村民の生き方が、私が羨ましく感じる程幸せそうに見えた。そういった宝といえるべきものを、現在起こっている国の発展の中で失ってほしくないと心から願っている。最後に、フィールドワークを通じて様々なことを教えてくださった先生方、この旅を笑いの絶えないものにしてくれた他の学生方々やシェラブチュエの皆さん、その他この旅に関わった全てのスタッフの方々に一生の思い出となるくらい貴重な経験をさせていただきこの場を借りて御礼を申し上げます。

10. 大切なのは心

総合人間学部1回生 浅井薫

1) はじめに

今回の国際交流科目を通じて印象に残ったことを印象の深い順に箇条書きにしていく。

2) ブータンの小僧さん

9月3日、タシガンのDistrict Hospitalに3人の子供のお坊さんが病院に来ていた。そのうちの1人が薬を受け取っていて、それを待っていた2人と少し話した。わたしの実家は寺で、その寺の宗派では肉を食べてもいいし、結婚してもいいということを説明し、これを奇妙に感じないか聞いた。すると、10才程の子が「そんなのは関係ない、大切なのは心だよ」と言った。

子供の頃から僧侶として様々な戒律の中で暮らしているモナスティック・スクールの生徒たち。日本には少しちがった僧侶がいることを知って、彼らが「そんなのお坊さんじゃないよ」と答えるのを私は期待していた。だから、10才程の子が

こんなことを言うのには本当に驚いた。もちろん、答えたのは1人だし、隣でニコニコ聞いていた子供を合わせても3人だから一般性には欠ける。けれども、モナスティック・スクールで行われている教育について肯定的な興味をもつには十分だ（*実際に調べてみた）。

*ブータンのモナスティック・スクール (monastic school) について

初めに、シェラブツェ・カレッジの学生の1人から聞いたことを紹介する。まず、モナスティック・スクールは一般名詞であり、国内にいくつもある。僧院で僧侶を教育する学校であり、僧院が経営する。生徒は皆すでに僧侶である。尼さんを育てるための学校もある。カンルンでは（他地域がどうかはわからない）、卒業者のほとんどが僧侶となり、少数はモナスティック・スクールの先生となったり、一般の学校 (modern school) のゾンカ語の先生になったりするという。

次に、インターネットで見つけた資料の一部を紹介する^(注18)。近代教育の導入以前は、僧院での教育がリテラシーと学識を得る唯一の手段だった。モナスティック・スクールのカリキュラムは、読み書き、経典の暗記、祈祷用の楽器の演奏などから始まり、高学年になるにつれて文法や作詩法などを学ぶようになる。また、外国との接触が増えているブータンにおいて、僧侶がうまくコミュニケーションをとれるように生徒は英語や算数も学ぶ。私が話したお坊さんも英語で堂々と話をしてくれた。

最後に、バジョディン僧院プロジェクトの出した「A monastic education」という記事の一部を紹介する^(注19)。僧院での教育の究極の目的は、生徒が悟りの境地に至ることであり、教える際に使われる言葉はChökey (Classical Tibetan) とゾンカ語だ。この僧院では数学、コンピューター、環境や農業の授業などが週末にある。これらは、もしも生徒が僧院を離れて俗世の生活に戻ったときのためらしい。

3) 農業に対する劣等感

9月3日、Rongthung primary schoolにて、先生が認めたこと。「ブータンでは小学校から大学まで教育は無償だ。しかし、試験に通らず、早期に

ドロップアウトする生徒たちがいて、そうした子が農業をするという意識がある。そして、これは農業に対して劣等感を持たせるので問題だ。」こうした意識の背景にあるのは、学科試験に通った優秀な子が次の教育段階に進むというシステムだろう。初めに、その先生がしきりに仰っていたのは、「優秀な子が試験を通るだけで、成績の良い子を積極的に弾き出すようなことはしていない」ということだった。しかし、これは、教育を受けられないのは学力が低かったから、という意識と表裏一体であり、農業に対する劣等感につながっているのではないだろうか。

この意識は離農の根本的な問題だといえる。もちろん、農業に対する意識以外にも問題は多くある。一般的に農業は収入が低いし、国土のほとんどが山岳であるブータンでは特に大変である。また、ブータンでは生き物を殺せず、獣害の被害も大きい。しかし、「学業を途中でドロップアウトした若者が農業をする」という意識はいっそう重大な問題であると私は考える。都市部に住む20歳から24歳までの若者の失業率は2012年時点で12.5%（全体の失業率は2.1%）といわれる（Labour Force Survey Report, 2012, Ministry of Labour and Human Resources）。教育水準が上がり、高い教育を受けた若者が都市に大量に流入するが、雇用が足りず職に就けない。しかし、彼らは都市に残り続ける。若者の農業に対する劣等感がこうした現象を引き起こしている面もあるはずだ。

また、いわゆるブータンの幸福というものがある農村共同体のあり方に基礎を持つならば、農業に対するこうした意識は「ブータンの幸福」を破壊する可能性がある。

4) 「フツ」のブータン人僧侶の彫像・画像

9月9日、プナカ・ゾン内のお堂にて、壁に描かれた絵の中に一般的な見た目のブータン人僧侶の姿がチラホラと見られた。また、ブッダやグルリンポチェの大きな彫像の横にも「フツ」のブータン人僧侶の彫像が立っていた。

日本のお寺ではなかなか珍しいことだ。ブータンでは一般的な僧侶が日本よりもずっと存在感があって、尊敬されているのではないかと感じた。日本に帰って、これについて調べてみると、チベット仏教には「四宝」という考え方があることを知っ

た。三宝である仏・法・僧に「師」を加えたものだ（ちなみにこの「僧」は仏に従う教団を指す）。ブータンの仏教は密教的色彩の濃いチベット仏教であり、密教では、その教えが師から弟子へと口伝される為、師の教えがその弟子の教義のもとになる。「現代ブータンを知るための60章」（平山修一）^(注20)によると、民家の仏壇や、お寺の祭壇の前には僧侶の写真が置かれていて、師が信頼され、崇められる対象であることを示している。寺院における一般的な僧侶の彫像・画像の存在と、この四宝の考え方には関係があるのだろう。

5) 洋服と民族衣装の融合

ブータン人が、キラヤゴとTシャツなどを合わせて着るのをカジュアルな場でよく目にした。多くの日本人にとって、和服は普段は使わないものであり、良くも悪くも特別なものである。しかし、ブータンでは職務中やオフィシャルな場では民族衣装の着用が義務付けられていて、キラヤゴは決して遠い存在ではない。このように、ある程度強制をすることは良いのではないと思われる。若者たちも含めて、民族衣装を着るのを嫌っている人には出会わなかったし、民族衣装を仕立てるお店も潰れず、生きた伝統文化として残っている。そして、着用を強制して、人々にとって身近なものであり続けた為に、キラヤゴは洋服と緩やかに混じりあったのではないだろうか。キラヤゴと洋服を合わせて着る姿は、明治の日本の様子と同様の。制度として定めるなど積極的に伝統文化を守ろうとすることで、初めは強制かもしれないが、結果的には観光客も地元の人も幸せになる可能性を示していると感じる。

写真15は下に着ていたTシャツを出したところ。写真16は上に洋服を着ている。和服とは違い、キラは上下が分かれているからこのような合わせ方がしやすいのもあるだろう。

6) 輪廻転生の負の側面

9月9日、ティンパーにあるJICAの職員の高野さんに教わったこと。ブータンには輪廻転生の考え方がある。それによれば、障害をもつ人は前世に罪を犯した人であり、その障害は前世の報いであるとされる。そして、家に隠されるなど後ろめたい存在として扱われてきた。

それまでブータン人の輪廻転生の考え方は良い文脈でしか見たことがなかった。来世の為にいま徳を積むだとか、どんな生物もつながっていて、あの虫もおじいちゃんの生まれかわりかもしれないから殺せないとか。また、辛いことがあっても来世に期待をもてるだとか。なので、今回の話は新鮮だった。現在、障害に関するこの思想がどれほど広まっているのかはわからない。しかし、ブータンの幸福にとって不可欠な仏教的宗教観がマイナスに作用することがあるのには驚いた。

また、高野さんは、「彼らは disability という能力を持っているのだ」と言ってまわることで、人々の意識を転換させ、障害をもつ人が彼らなりの能力を発揮して社会参加する道を開ける、と仰っていた。この言説によって、彼らは後ろめたく思われるべき存在では決してないと人々は気づくのだろう。

ここで感じたのは、根強く残るブータンの宗教観には良い面だけでなく、負の側面もあり、それが迷信などの形をとって人々の意識の中に現れてくるといふこと。そして、新たな言説を生み出してアピールしていくことで、その意識を転換させることができるかもしれないということだ。

7) おわりに

教育水準が大幅に向上したことにより、自分は農業以外のことができるはずだと考えて若者が地元の農村を離れて都市に移る。しかし、彼らが求めるようなホワイトカラーの職の雇用は十分でなく、仕事に就けない。それでも、彼らの多くは地元に戻らず都市に残る。なおかつ、建設業など、都市におけるブルーカラーの仕事にも就かない。こうした現象の一つの要因として農業への劣等感を挙げ、それは近代教育のシステムが作り上げたのではないかと述べた。

一方で、ブータンのお坊さんについても述べた。ブータンでは師となる僧侶が信頼され、とても敬われている。その僧侶を育てる学校であるモナステック・スクールでは、子供たちが生きる上でとても大切な教を学んでいて、そのうちの1人の深い理解に私は心を打たれた。

離農の問題を解決する方法としては様々なものがある。先日 Facebook で見た記事では、educated な3人の農民がかなり効率の良い農業を行ってい

ることを、TsheringTobgay というアカウントの政治家が称えていた。また、ブータンは、農産物の「100%オーガニック」を目指し有機農業を推し進め、農業製品のブランド化を狙っている。

ここで、私は新たな解決策として次のようなことを考える。伝統的な教育機関として存在してきたモナステック・スクールのエッセンスを近代教育に取り入れることで若者の意識を変えることはできないだろうか。あるいは、モナステック・スクールを卒業した生徒が農村に戻る仕組みをもっと整えるという方向性もあるかもしれない。このような可能性を考えたいうえで、私はモナステック・スクールについてもっと深く知るべきだと感じる。

「モナステック・スクールの教育と近代教育の融合」という考えについて調べたところ、当時シェラブツェ・カレッジのディレクターだった Singye Namgyel さんと Brian D. Denman さんが書いた “Convergence of monastic and modern education in Bhutan” という論文の中に似たような考えがあった。この Convergence の意味は “the coming together of the approaches of the monastic order and those of modern education” である^(註21)。この観点で考察をした人は他にも何人かいるようで、この論文の中で取り上げられている。

モナステック・スクールでは、真に良く生きるための教育を受けることができる。物質的な豊かさが全てでないこと知り、もっと多様な価値観に触れることができるのではないだろうか。「足るを知る」精神や、生まれた村で農業をしながら家族や近所の人々と共に生きていく幸せなどを若いうちに教わることは極めて有意だ。大切なのは心だといつまでも言いつづけてほしい。

8) 追記

私が挙げた5つの「印象に残ったこと」。この全てに共通するもの、つまり、5つの根底に流れているものは何かを考えた。そして、私が発見したのは、「人々の意識」だ。小僧さんの認識、農への劣等感、「師」の捉え方、西洋文化への態度、障害に関する迷信。日本人や自分自身と同じだと感じたり、違うと感じたり、私はことさら人々の意識に興味があるようだ。正直に言うと、農業に関しては自分にも同じ感覚がないとは言い切れな

いし、日本でも未だに同じ問題が存在していると思う。だからこそモナスティック・スクールを考へることは日本にとっても意義があるのだろう。

「意識」についてももう1つ。日本に帰ってこれを書く際、今回の科目への自分の志望動機書を読み直した。すると、「こんなことに興味がある」「こんなことを知りたい」という様々な自分の関心事に、「印象に残ったこと」がうまく対応していたのだ。ブータンにいた間は恥ずかしながら志望動機書の内容なんてすっかり忘れていた。閑空で「印象に残ったこと」を選んだ時も意識していなかった。だから、知らず知らずのうちに自分の興味のある内容を見てくれていたのだなあと心の奥深くにいる自分の存在を感じた^(注22)。

9) 謝辞

今回こうして貴重な体験をできたことを本当にありがたく思う。書ききれないほどのたくさんの感動があって、私の人生観は確かに変わった。ブータンのあの雄大な自然と、それと見事に調和する家々、そしてそこで人々が幸せそうに暮らす姿が忘れられない。安藤先生、坂本先生、一緒に旅をした学生、シェアブツェ・カレッジを初めとするブータンの皆さま、昨年この科目に参加した先輩方、国際交流課の皆さまに心から感謝したい。本当にお世話になりました。

注)

注 18) Dr. Yonten Dargye “An overview of Bhutan’s Monastic Education System”

注 19) Phajoding Monastery Project (2012) “A monastic education” <http://phajodingmonastery.com/a-monastic-education/>

注 20) 平山修一 2005 『現代ブータンを知るための60章』明石書店：297.

注 21) Brian D. Denman and Singye Namgyel (2008) “Convergence of monastic and modern education in Bhutan” *International Review of Education* 54, 487

注 22) 本節を執筆するにあたって以下の文献を参照した。

[1] 御手洗瑞子 2012 『ブータン、これでいいのだ』新潮社。

[2] 本林靖久、高橋孝郎 2013 『ブータンで本当

の幸せについて考えてみました。「足るを知る」と経済成長は両立するのだろうか?』阪急コミュニケーションズ。

11. 東ブータンの放棄田 進む農村の過疎化

文学部1回生 吉野月華

1) はじめに

このレポートは、2015年度京都大学全学共通科目 東ブータンの農村に学ぶ発展のあり方を受講し、2015年8月30日から9月10日のブータン滞在中に私が学んだこと、見聞きしたことに基づいて作成する。途上国ブータンでは、たくさんの物事を見て聞いて、多くのことを学んだが、その中で私は農村の過疎化について強い問題意識を持った。私の暮らす日本でも同じ問題が起こっているためということもある。しかし、日本とブータンではその要因も速度も人々の問題意識も、全く異なる。同じ問題として扱うのは適切でないように思われる。ブータンの過疎化は深刻であるが、実際に現地を回ってみて、その要因には共感できる部分も多々あった。東ブータンの農村の過疎化について、主要要因と、私なりの見解を述べる。

2) 不十分なインフラ整備 危険な道路

空港のあるパロから東ブータンの主要都市タシガンまで行くには、東西縦貫道(国道1号線)を通らなければならない。人々が東西移動をする際には、必ずこの道を使用する。我々もこの道を使用した。道中では、いたるところで道路整備が行われていた。しかし、この道路の舗装はまだまだ不十分であり、崩れている箇所をいくつも目にした。我々の渡航の数週間前から、ブータンでは雨が降り続いていた。それがブータンのもろい地盤にしみこみ、地盤が緩んでいた。それでも道路整備が続けられていたために、整備しているところが崩れてしまう。崩れ落ちた土砂で道路が塞がれると、ショベルカーでその土砂をどけて道を開けて、車を通す。我々も何度もその状況に直面した(写真18)。私自身は、目の前で土砂崩れがおきているという危険な状況にとっても驚いたし、恐怖を感じていた。今まで生きてきた中で一番死に近

い経験をしている、と感じていた。しかし、ブータンの人々にとってはこのような事態は日常茶飯事であり、みんな落ち着いていた。道路があくまで待たされるのだが、文句を言うような人は誰もいない。不自由な移動、命がけの移動にすっかり慣れてしまっている。

実際に、この危険な道路で命を落とす人もいる。パロからタシガンへの移動中にたくさんの土砂崩れを目撃し、実際に遭遇して私を感じたのは、帰りにもこの道を通らなければならないということに対する恐怖であった。ここで私は、ブータンの人だっけ自分たちが命がけで移動しているということはわかっている。そのため東ブータンの人々が一度西へ移動すると、帰りたくなるという気持ちがあまれるのではないかと考えてしまった。東ブータンの人々が西へ移動する要因は色々あるだろうが、帰ってこなくなってしまう要因の一つとして、この危険な道路状態も考えられるのではないかと。

3) 人々の意識

ラデイ村のコミュニティーホールで寝泊まりした際に、村長が東ブータンの農業に関するプレゼンテーションをしてくださった。その中で、東ブータンでの農業の大変さについて話されていた。村のインフラ整備が進んでいない（写真 19）、進まないことや、獣害の深刻さなどである。私にとって特に印象的だったのは、この深刻な獣害に関する話である。ブータンには不殺生の文化があり、農業を営む上での害虫・害獣も人々は決して殺さない。そのため害虫・害獣被害が深刻なのである。政府は害獣被害に対して保障をするのだが、それも不十分である。よって農業収益が低くなってしまふ。

また、もう一つ人々の意識の問題として、高い教育を受けた人々が、農業に従事することを恥じる傾向がある、ということが挙げられる。農業は、誰でもなれる職業だから、ということが主な理由らしい。人々の間にこの意識が広がっていると、教育制度が整うにつれて、どんどん農業従事者が少なくなってしまう。この意識が広がっていくと、教育を受けていないものでも農業という職に就くことを恥じるようになる可能性がある。東ブータンでは、農業以外の職業はとて少ないため、農

業以外の仕事に就きたい若者は地元を離れてしまふ。実際にシェラブツェ大学の学生には、農業従事を希望する生徒は少なかった。

しかしブータンは地理的に不便である上面積も小さく人口も少なく、発展途上であり産業が十分に発達していない。産業規模がとても小さいため、都市に出て行っても仕事がないのが現状である。農村の過疎化だけでなく、それに伴う都市の過密、失業者の増加や治安悪化なども問題となっている。

4) 終わりに

上で挙げたように、東ブータンの農村の過疎化には様々な要因があり、共感できるものもある。しかし、体裁を保つためだけのために村を捨てるよりも、村に残って農業をしたほうが結果的に大きな収入となることもあるし、何より農業をすることは羽東師伊ことではないということ若者に理解させなければならない。この問題の解決には、人々の意識改革が必要である。そこで教育が大きな役割を果たすのではないかと。

12. おわりに:雨

京都大学白眉センター/
京都大学東南アジア研究所 坂本龍太

ブータン出発前の8月17日(月曜日)、18日(火曜日)、トランジットで立ち寄るタイのバンコクで2日連続して爆破テロが起こった。17日夜の爆弾テロでは20名の死亡、120名以上の負傷が報じられていた^(注23)。学生さんの保護者の中には不安を感じて我が子の渡航のキャンセルを考慮した方もおられたと思うが、安藤さんと私はバンコクのテロ事件よりも別のことを強く心配していた。ブータンの天気予報が我々の滞在予定期間中ほぼ全日雨だったことである。比較的治安が安定しているブータン渡航時に我々がより強く恐れるのは、交通事故、崖からの転落、犬による咬傷、土砂崩れなどであり、雨が続くということは、特に、交通事故、崖からの転落、土砂崩れのリスクが格段に増すと考えられる。ブータンは北緯26.40度～28.20度、ヒマラヤ山脈南面に位置し、標高は南部の約百メートルから北部の約七千五百

メートルへとせり上がっている^(注24)。我々が今回の旅で通る西部、中部、東部は標高約九百から三千八百メートルで、その大部分がモンスーン気候に区分される。特に「7月、8月の遠出は避けろ」とブータンでよく言われていた。モンスーンは6月後半から9月後半の期間に年間降雨量の6～9割をもたらすと推計されている^(注25)。ただし、大規模な地すべりだけでも、2005年4月25日モンガル・ルンツェ間、2006年6月2日ティンブーとこの期間から外れる期間にも地すべりが報告されており、特に2009年5月23日にベンガル湾中部で発生したサイクロン・アイラはブータン全域に影響を及ぼし、洪水や斜面崩壊などにより15名の死者をもたらしたと報告されている^(注26、27)。冬期には路面の凍結の不安があるため、10月あたりが最適ということになるが学生さんの授業の都合上そこにブータン渡航を持っていくのは非常に難しい。

我々は昨年度の国際交流科目と同様の時期、8月30日(日曜日)に予定通り関西国際空港を立ち、タイを経由してブータンのパロ空港に着いた。ティンブーに一泊し、翌日中部ブムタンに一泊し、9月1日(火曜日)朝7時前にブムタンを発ってカンルンに向かった。予報通り雨が続けていた。途中、通った交通事故や地すべりの多発地帯であるNamlingBrak(ナムリン崖)では、「これまでの人生で今が一番怖い」という学生の言葉が聞こえた。このナムリン崖は、道路建設のための20年に渡る工事期間中に240名を超える方の命を奪い、1998年にはこの付近でのバスの転落事故により58名の方の命が失われたとされる^(注25)。その日、東部タシガンに着いた時点ですでに日は暮れており、予定を変更してタシガン宿泊も検討したが、「あと45分いけば着くから」と話す運転手さんの希望もあって、夕食後タシガンを立ち、カンルンに向かった。雨が降り注ぐ中、夜間の移動となった。案の定、シェラブツェ・カレッジに到着寸前のところで我々の2台のバスのうち1台がぬかるんだ道にはまってしまった。暗闇の中、1時間ほど立ち往生した後、シェラブツェの学生及び教員がロープを持って駆け付けてくれ、車はぬかるみを脱した。ブータンではよくあることだが、学生を引率する行程で、雨の中の夜間の移動は今後避けるべきであると反省した。

翌日以降も空模様を気にする中、雨は降り続いた。朝起きて安藤さんと最初に交わす言葉は「(雨が)また降りましたね」、という日々であった。安藤さんを中心に、ガイドのカルマ・ギェルツェン氏と共にインド気象局(<http://www.imd.gov.in/>)が公表している衛星画像を毎日確認し、国際電話で本学防災研究所の林泰一先生に御助言を求めながら、日程を検討し、予定よりも1日早く出発の2日前までに西に戻る決断を下した。途中セングル付近の道路で地すべりによる通行止めのため3時間ほど立ち往生になった。我々が通過した後に、同じ所で再び地すべりが起こり、その後数日間通行止めになったことを伝え聞いた。もし早く西に戻る決断をしていなかったら、帰国が遅れる危険があった。今年度はモンスーンが例年よりも長かったということもあると思うが、来年度以降の渡航時期を改めて慎重に検討する必要性を感じた。

そんな期間中、学生たちは皆、一日一日を遅しく過ごしていたように思う。シェラブツェの学生5名が合流してからは、ラディ地区、バルツァム地区で役場のGewog Yargay Tshogdu Hallを借りて、両校学生が共同生活を行った。同じ釜の飯を食らい、村を探索し、部屋に帰って輪になって踊り、夜空を見上げ、寝袋を広げて語り、眠る。彼らの中で国籍という名の垣根は急速に取り払われていってしまうようだ。

9月6日(日曜日)が別れの日だった。その日タシガンのカフェで昼食をとった後、我々はバスで西へ立ち、シェラブツェの学生5名は東へ帰る。朝食時から少し神妙な空気が流れていた。そして、いざ別れの時、バスの前でブンツォさんが顔をゆがめるや壘を切ったように学生らが涙を流し出した。手を取り合い、見つめ合い、抱き合いながら別れのせつなさをかみしめていた。隣でその光景を目の当たりにして、教員2人もグッと来ていた。自らの学生時代を振り返って、映画や本など以外の実体験として涙を流した経験はごく限られている。数日あまりの共同生活の後に彼らが流した涙は一体どこから来るのかと考えさせられた。彼らの青春が美しいと思った。何はともあれ9月11日(金曜日)朝、全員無事に関西国際空港に到着し、ほっと息をついた。

注)

注 23) 日本経済新聞 速報 タイ爆弾テロ、男
を逮捕 関与の疑い 2015年8月29日

注 24) Karma Kuenza, YeshiDorji, DorjiWangda.
Landslides in Bhutan.

注 25) Dunning SA, Massey CI, Rosser NJ. Structural
and geomorphological features of landslides in the
Bhutan Himalaya derived from Terrestrial Laser
Scanning. *Geomorphology* 2009; 103: 17-29.

注 26) 小森次郎、小池徹、檜垣大助. 2009年のブー
タンの自然災害—地象・水象・気候災害—.
自然災害科学 2010; 29-2: 233-243.

注 27) 安田匡. ブータン王国と首都ティンブー
市の地質, 地質災害および防災について. *地
すべり北海道* 32. 1-8. 2015年3月

Summary

An Attempt of Mutual Enlightening Practice-oriented Area Studies Based on Practical Philosophy in Eastern Bhutan: The Short Report Collections on the Study Tour 2015 of Kyoto University Overseas Study Program 2015 “An Alternative Approach to Development: learning from rural Bhutan between August 29 and September 11, 2015”

Kazuo Ando¹⁾, Keiko Nishimoto²⁾, Ayane Deyashiki³⁾, Chihiro Fukushima⁴⁾,
Ami Inukai⁵⁾, Saki Tanaka⁶⁾, Hiroki Shinkawa⁶⁾, Naoki Yokohata⁵⁾, Yudai Takaura⁷⁾,
Kaoru Asai⁶⁾, Tsukika Yoshino⁸⁾, Ryota Sakamoto^{1),9)}

- 1) Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Japan
- 2) Graduate School of Management, Kyoto University, Japan
- 3) Faculty of Pharmaceutical Sciences, Kyoto University, Japan
- 4) Faculty of Economics, Kyoto University, Japan
- 5) Faculty of Agriculture, Kyoto University, Japan
- 6) Faculty of Integrated Human Studies, Kyoto University, Japan
- 7) Faculty of Science, Kyoto University, Japan
- 8) Faculty of Letters, Kyoto University, Japan
- 9) Hakubi Center for Advanced Research, Kyoto University, Japan

Ten students and two faculty members of Kyoto University visited the eastern Bhutan. Throughout the study tour, dynamic changes of climates, vegetation, and livelihood were observed in the altitude range about 900 – 3800 m. After arriving in Trashigang District, they made presentations about Japanese cultures in Sherubtse College and the students in Sherubtse College made a presentation about history and culture of Bhutan. After that, the students participated in the classes of *Driglam Namzhag* (Bhutanese Etiquette) and the students of Sherubtse performed traditional and modern dances. The students of Kyoto University together with the five Sherubtse college students conducted field studies in Kanglung, Trashigang, Radhi and Bartsham. In Kanglung, they visited primary a school and participated into the classes together with children. In Trashigang, we paid a courtesy call on Trashigang Dzongda (the governor) and visited a district hospital. In the hospital, several students received a pulse diagnosis by Drungtsho (doctor of traditional medicine). In Radhi, the students made visits of farmers' houses and the several local institutions such as Gewog offices (government offices), Basic Health Units (BHUs), and Lhakhangs & Gompas (temples). They saw the situation of abandoned paddy fields and listened to the stories from the

villagers about animal damages. In Bartsham, they visited a temple and listened to the legend of Chana Dorji (Vajrapani, protector of the Buddha) devouring snakes. The students of the both schools fostered friendships by sharing the experience of the field study. This paper consists of ten short essay articles regarding the issues pointed out by the participants of the 10 students and 2 teachers through their intuitive understanding about the facts met at the sites during the study tour. They are discussing the facts from the viewpoints of comparison of society and culture. Each discussion is a trial of practical philosophy to search the “right” way of life to be taken by a human. It is strongly illustrated in this paper that the mutual enlightening practice-oriented Area Studies or, broadly, the field work typed Area Studies should search the academic goals in Practical Philosophy.

This report consists of reports from 10 students and 2 teachers who participated into the program of Overseas Study Program in Kyoto University, “An alternative approach to development: learning from rural Bhutan”. The title of each report is as follows: “Try to Establish the Method of Mutual Enlightening Practice-oriented Area Studies as Participatory Area Study (Kazuo Ando)”, “Regional Revitalization in Eastern Bhutan (Keiko Nishimoto)”, “What Broadened My Horizons (Ayane Deyashiki)”, “Consciousness of Bhutanese and Happiness (Chihiro Fukushima)”, “Lessons of Happiness=Peace, in Bhutan (Ami Inukai)”, “Prospect of Bhutan and Students (Saki Tanaka)”, “What I Got beyond the Mist (Hiroki Shinkawa)”, “Problems of Agriculture in Bhutan (Naoki Yokohata)”, “Urbanizing Hidden Land (Yudai Takaura)”, “What’s Important Is Heart (Kaoru Asai)”, “Abandoned Rice Fields and Depopulation in Rural Villages (Tsukika Yoshino)”, and “Rain (Ryota Sakamoto)”